手広遺跡

龍郷町文化財調査報告書

1986

鹿児島県大島郡龍郷町教育委員会

序

本遺跡は龍郷町手広地区の壮年団が地区民のレクリェーションに供するため同地区の海岸砂丘地を一部整地した時、砂丘崖面に遺物包含層が露呈し、発見されたものであります。

遺跡のある本地区は、太平洋を前にした龍郷町内でも指おりの景勝地として知られ、町内外からも多くの行楽客でにぎわうところです。

奄美考古学会員の協力を得て、昭和53年度に町の事業として第１次調査を実施し、この時に、この遺跡が間層をはさむ４枚以上の遺物包含層で形成されていることがわかり、学術上たいへん貴重なものであることが判明しました。そのまま、放置しておくと、砂丘地帯であるため自然崩壊する恐れが出てきましたので昭和59年度に調査に詳しい熊本大学考古学教室の白木原和美教授に依頼し、発掘に踏み切ったものであります。ご一行の発掘調査作業は真夏の炎天の下に意欲的に進められ、その学究的作業には畏敬の念をもって接したものであります。ここに改めて深甚なる感謝とお礼を申しあげます。

本書は、まことに貴重な価置ある報告書であります。多くの方々のご利用をいただけましたら幸いに存じます。そして、町民あげて「文化財」の価置を認識し大切に守っていこうとする心の高まりを期待するものであります。

昭和61年３月10日

龍郷町教育委員会

教育長　濱田好一

目　　次

序

本　　論

Ⅰ．発掘調査に至る経過…… 3

Ⅱ．調査の実施と報告書の作成…… 4

Ⅲ．遺跡の位置…… 5

Ⅳ．調査の概要…… 6

1．調査区の設定…… 6

2．層　　序…… 6

Ⅴ．遺　　構……10

1．弧状配列ピット……10

2．石 組 遺 構……10

3．焼礫の集積した遺構……14

Ⅵ．遺　　物……14

1．土　　器……14

2．土　製　品……26

3．石　　器……27

4．骨・貝製品……29

Ⅶ．おわりに……30

付　　説

Ⅰ．動物遺存体……33

1．イ ノ シ シ……33

2．ウミガメ類……34

Ⅱ．出土貝類一覧表……35

Ⅲ．出土貝類と民俗……35

Ⅳ．C^{14}測定結果……35

（題字　濱田好一）

〔本 論〕

Ⅰ．発掘調査に至る経過

◎1976年２月

手広壮年団が地区民のレクリェーションに供するため同地区の海岸砂丘を整地し、バレーボールコートを設置する。その際、砂丘崖面に遺物包含層が露呈し、遺跡が発見された。

◎1976年４月

奄美考古学会（里山勇広氏）が学術的価値の高い遺跡であることを確認し、町教育委員会に通報する。町教育委員会は現状を確認し、保全策を行う。

◎1976年７月

遺跡地砂丘において無認可の砂採取業者による採掘が行われる。再三の作業中止を勧告をした末、同年11月にその中止をみる。

◎1977年５月

採掘場入口を厳重に杭柵し、「埋蔵文化財包蔵地」の標柱を立て遺跡の破壊行為を防ぐ。（この間、熊本大学教授白木原和美・同大学講師佐藤伸二氏らが視察する。）

◎1978年

文化財保護事業の一環として、第１次発掘調査を決定し、実行を奄美考古学会に委嘱[註①]した。

◎1983年11月

町教育委員会では、保存調査について協議し（町三役を交えて）調査をすることを決定する。

◎1984年７月

熊本大学古考学研究室（白木原和美氏）に発掘調査を依頼し、同年７月21日より８月31日までの期間実施する。

◎発掘調査の組織

調査の責任者　　龍郷町教育長　築島一義

調査事務担当者　社会教育課長　円野和寛外職員

調査現場担当者　熊本大学教授　白木原和美氏

調査参加者　笠利町歴史民俗資料館職員・奄美考古学会員
中山清美氏

調査協力者　手広地区民・手広区長

II．調査の実施と報告の作成

◎調査開始から報告書の作成まで、その総指揮は白木原和美氏がとったが、発掘現場の指揮は、八代高等工業専門学校助教授佐藤伸二氏と熊本大学院生西谷大氏が協力してとられた。

◎報告書作成のための研究活動には熊本大学の考古学専攻学生全員が参加した。編輯は佐藤氏、西谷氏、考古学研究室助手馬原和広氏の三氏が担当し、「本文」の執筆には馬原氏が当った。

◎貝類の同定は熊本大学薬学部浜田善利氏に御指導いただき、獣骨の分類は木村幾多郎氏が担当して下さった。貝類に関する民俗調査表の作成には笠利町歴史民俗資料館中山清美氏の御援助をいただいた。また梅光女学院大学木下尚子氏、住用村教育委員会森田勇氏からも御援助と御教示をいただいた。

◎上記以外の方で調査に参加した方々は下記の通りである。猛暑にかかわらずその持場持場で奮闘していただいた。別記する所以である。

天理大学;　4年次生、小寺誠

京都大学;　3年次生、桑原武男

九州大学;　3年次生、大呑善晃

熊本大学;　大学院生、明瀬慎吾

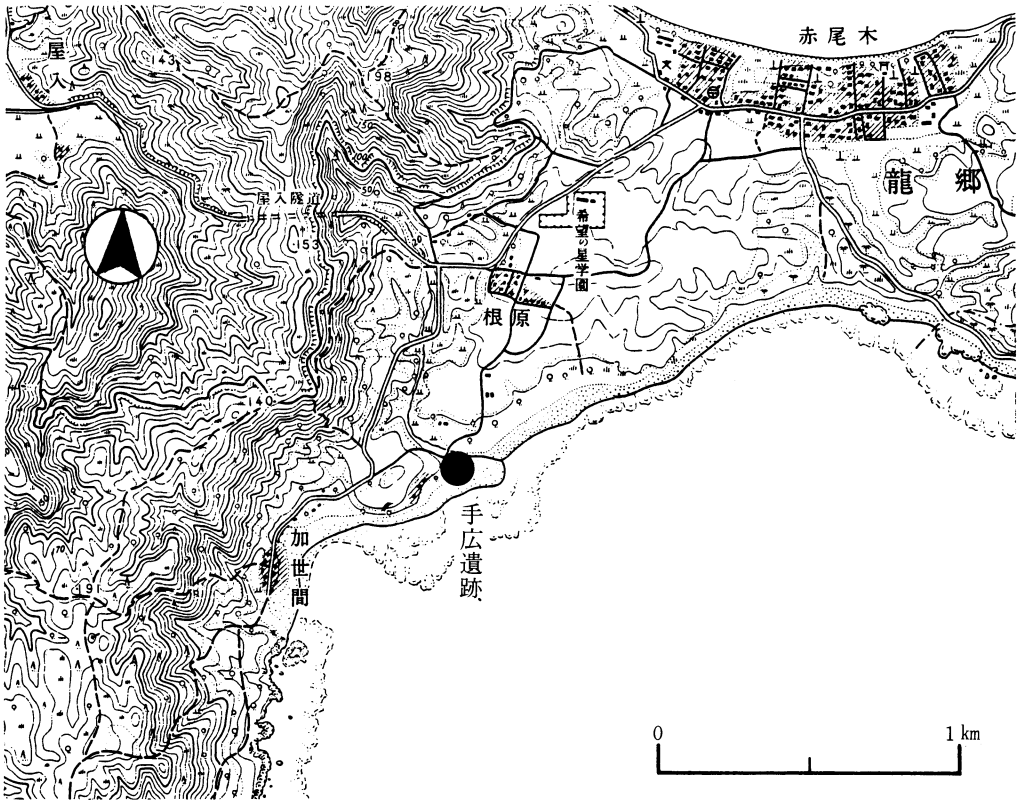
4年次生、友口恵子・藤崎伸子

3年次生、田中由美・徳永貞紹・西島良美・野尾晴一朗・村上恭通・村田京子・高田浩善・

2年次生、岡美詠子・木島慎治・斉藤康子・坂井義哉・藤崎周太郎

1年次生、上田隆史・隈部敏明・横井久雄・臼山　修・井上　靖

八代高等工業専門学校;　2年次生、山崎秀喜



第1図　手広遺跡付近の地勢

III．遺跡の位置

手広遺跡のある龍郷町は奄美大島の北部に位置し、平家落人伝説・西郷南洲流謫の地としても知られる所である。北は東シナ海、南は太平洋に面し、西は標高300ｍの本茶峠を介して名瀬市に、東は幅800ｍ程の赤尾木地峡によって笠利町に通じている。地形は一般に険しく、南北に標高300ｍ前後の長雲山脈・標高200前後の十五山系が並行して走っている。また東北部には笠利湾がひらけている。

手広遺跡は十五山系の太平洋側、山麓から延びる標高20ｍ程の海岸段丘の末端に形成された砂丘上に立地する。地籍は鹿児島県大島郡龍郷町字牧1730・1731及び字小泊である。遺跡に接して十五山系に源を発する手広川が太平洋に注ぎ、遺跡の北側に低湿地を形成している。遺跡の形成当時はこの湿地帯に海水が流入し、小規模な入江を形

成していた可能性が考えられる。また、付近にはウフタ遺跡・赤尾木遺跡などが点在しており、当遺跡はこれらの遺跡とともに、笠利半島東岸からつながる遺跡集中地帯の南端部を形成している。（第１図・第２図）

Ⅳ．調査の概要

1．調査区の設定

発掘は、第一次調査区の西側、採砂並びに崩落の及んでいない約250㎡について行なうこととし、第一次調査トレンチの西壁ライン延長上に基準点を置き、その延長線を軸にして５×５ｍの方眼状にグリッドを設定した。また、グリッドには、南から北へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ……、西から東へ１・２・３・４……とそれぞれ名づけ、Ａ－３区・Ｃ－７区等のように呼称することにした（第２図）。

発掘に際しては、壁面崩落の危険性を除外するため下層へ向かうに従って調査面積を縮少し、断面階段状に掘り進めていった（図版４上）。

2．層序（第３図）

今回の調査では19の基本層序が確認されたが、前回調査の層序とは若干異なる点がある。

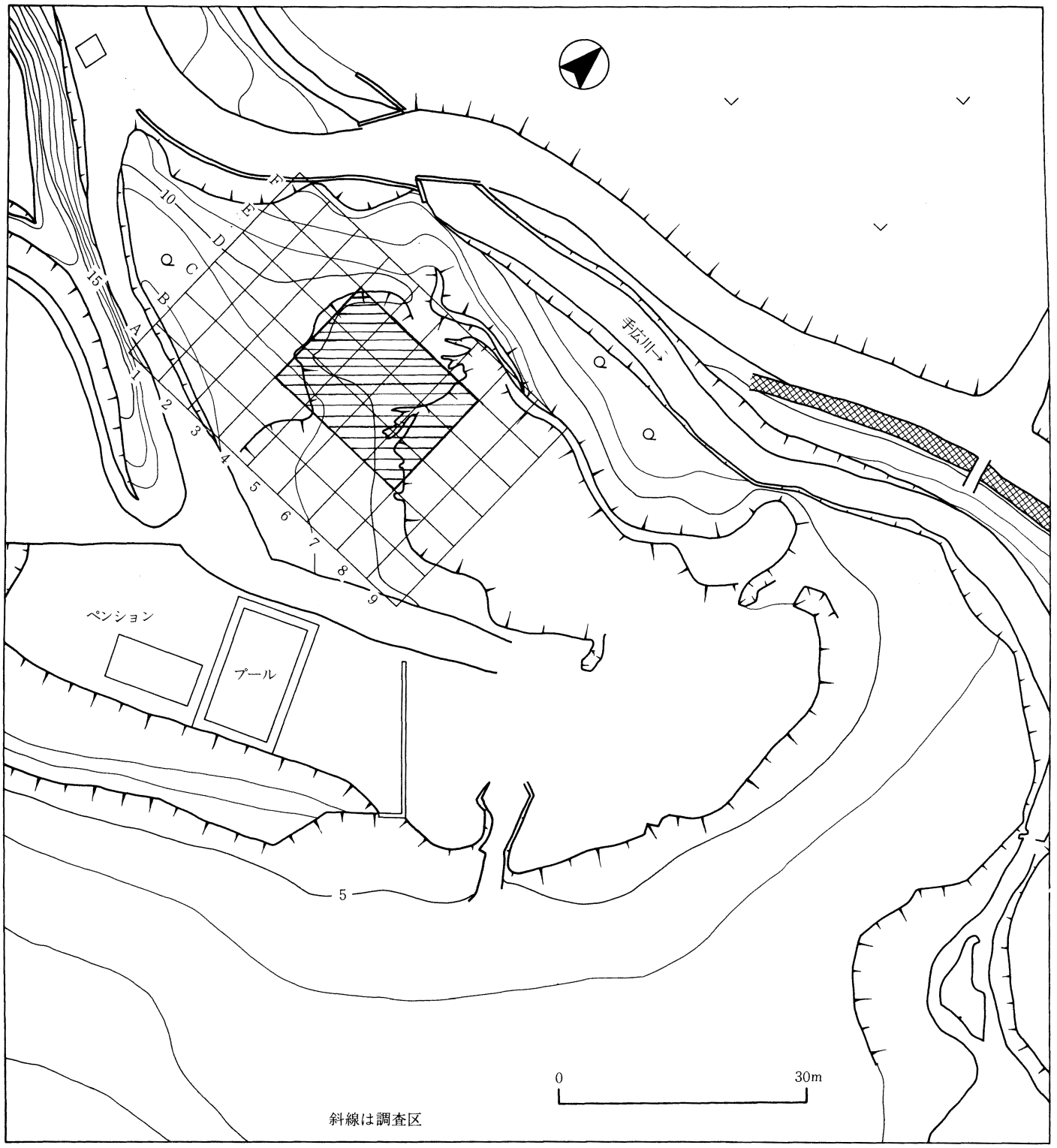
第１層：現地表であり、礫まじりの赤橙色土層で、客土と思われる。無遺物層である。

第２層：褐色砂層。部分によって細分可能であるが、ここでは一括した。無遺物層である。

第３層：黒褐色砂層。遺物包含層である。厚さは約30㎝。第１次調査の第２層（第１文化層）に対応し、兼久式土器を主とする土器片・石器・貝製品・獣魚骨・貝・炭化物等を出土した。最下面からはピットを多数検出したが、この中には石を嵌めてあって柱穴と推定されるものもあった。しかし、環状にめぐるもの一例が確認された他は、これらのピット相互間には規則性は見出し難かった。

第４層：黄褐色砂層。一個体分の土器がまとまって出土している。

第５層：黄褐色の砂層で固くしまっている。遺物包含層である。厚さは約20㎝。第１次調査では遺物包含層として確認されなかった層である。土器片・石器・貝製品・



第 2 図　手広遺跡地形実測図

獣魚骨等を出土する。

第６層：黒褐色砂層。遺物包含層である。厚さ約50cm。第１次調査の第２・第３文化層に対応する。これは、第１次調査地点付近に限ってこの層が第７層をはさんで上・下２枚に分かれていたことによる。当層からは、土器片・石器（石鏃を含む）・貝製品・獣魚骨等を出土した。また、最下面からは石組遺構が３基・焼けた石ばかりの集石遺構が検出された。なお、第6′層は１号石組遺構の覆土である。

第７層：明黄褐色砂層。無遺物層である。

第８層：明黄褐色砂層。無遺物層である。

第９層：明褐色砂層。厚さ約20cm。第１次調査の第４文化層に相当する。第８層が途中でなくなっている部分については第６層との識別が困難である。土器片・石器・貝製品・魚骨等が出土した。

第10層：黄褐色砂層。無遺物層である。

第11層：暗褐色砂層。遺物包含層である。厚さは約20cm。第１次調査の第５文化層に相当する。土器片（宇宿上層式・喜念Ⅰ式を主体とする）・石器（石斧を含む）貝製品が出土した。また、最下面より炭まじりのピットが検出されている。

第12層：明黄褐色砂層。無遺物層。上からしまった砂層・小礫混りの砂層・きめの細かいわずかに礫を含む砂層の３層に細分することも可能である。

第13層：暗褐色砂層でありその下面では小礫を含む。遺物包含層である。厚さ約10cm。第１次調査の第６文化層に対応する。土器片（面縄西洞式土器を含む）・石器・貝製品等が出土した。また、最下面より、環状に並ぶ石組遺構・同一種の巻貝のみを集中して有するピット・種別にまとめられた貝溜り等を検出した。

第14層：灰褐色砂層。厚さ約20cm。今回の調査で新しく確認された遺物包含層である。しまった部分と目の粗い砂の部分とがある。礫の混入が目立ち、その下面においては、こぶし大から人頭大までの大きさのものが無秩序に堆積している。土器片（嘉徳Ⅰ・Ⅱ式を含む）等を出土した他、最下面から焼礫の集積した遺構が検出された。

第15層：黒褐色礫層。無遺物層である。有機物による汚染がひどく手広川の河川敷であったと思われる。

第16層：ビーチロック層。

第17層：黒褐色砂層。土器片数点が出土した。

第18層：灰褐色粘土層。無遺物層である。

第19層：青灰色粘土層。無遺物層である。

Ⅴ．遺構

1．弧状配列ピット（図版２上）

Ｃ－４区第３層下面より検出された。第３層からは、他に、中に石を持つもの、持たないものなど多数の柱穴と思われるピットを検出したが、規則性は見い出し難く、これは弧状に配列する唯一の例である。弧状に並ぶピットは７基、いずれも直径20cm・深さ25cm程度である。そのうち石を有するものが２基ある。ピットに囲まれる部分には、深さ６～７cmの浅い掘り込みと、暗赤褐色を呈した焼土の広がりが検出された。おそらく、長径約2.5m・短径約２mの楕円形プランを呈する平地住居の柱穴と思われる。

2．石組遺構（第４図，図版２下・３上）

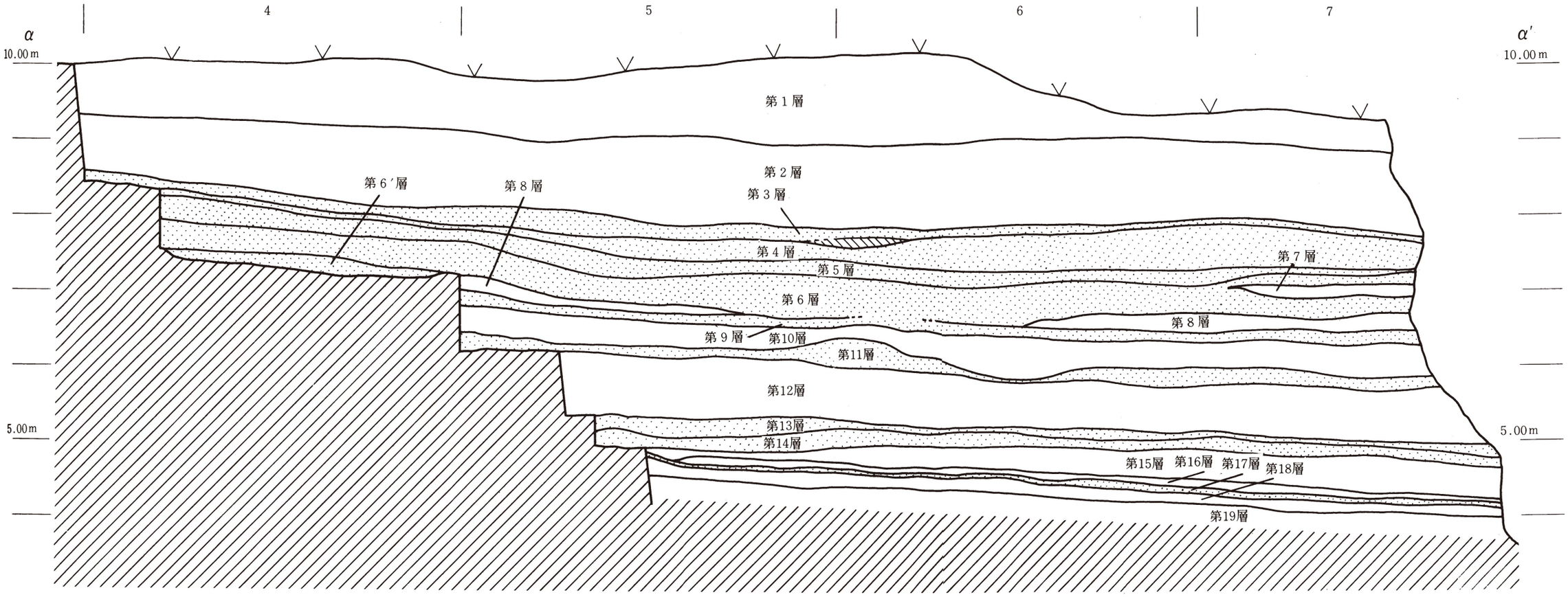
石組遺構は、第６層下面より３基（１・２・３号)第９層下面より１基（４号）検出された。

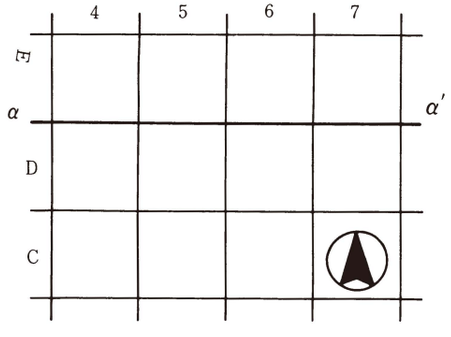
１・２号遺構（第４図，図版２下）

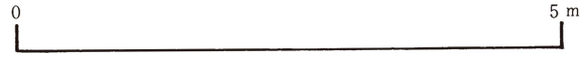
Ｄ－４区からＥ－５区にわたって検出された。いずれも30cm程の掘り込みを作って、その立ち上がりの部分に10～30cm程の石を組んでおり、プランは一辺２m程の隅丸方形ではなかったかと思われる。両遺構は切り合い関係にあるが、１号遺構（外側にめぐる）は２号遺構（内側）によって切られており、１号遺構の先行が確かめられた。いずれも掘り込みの中に、炭化物・土器片等を含む黒褐色のしまった砂層が堆積していた。２号遺構は掘り込み最下面に焼土の広がりを持ち、その上に固結した灰・炭化物まじりの層がさらに堆積していた。柱穴らしきものは確認できなかったが、住居址と見てさしかえないであろう。

３号遺構（図版２下）

Ｅ－４区からＥ－５区にわたって検出された。Ｅ－４区からＥ－５区にかけては、第６層の下は黄褐色土の堆積が見られ、西から東へ傾斜しているが、この遺構はその傾斜面の上に作られている。遺構は、西から東へ長く延びる１列（長さ約４ｍ）と、



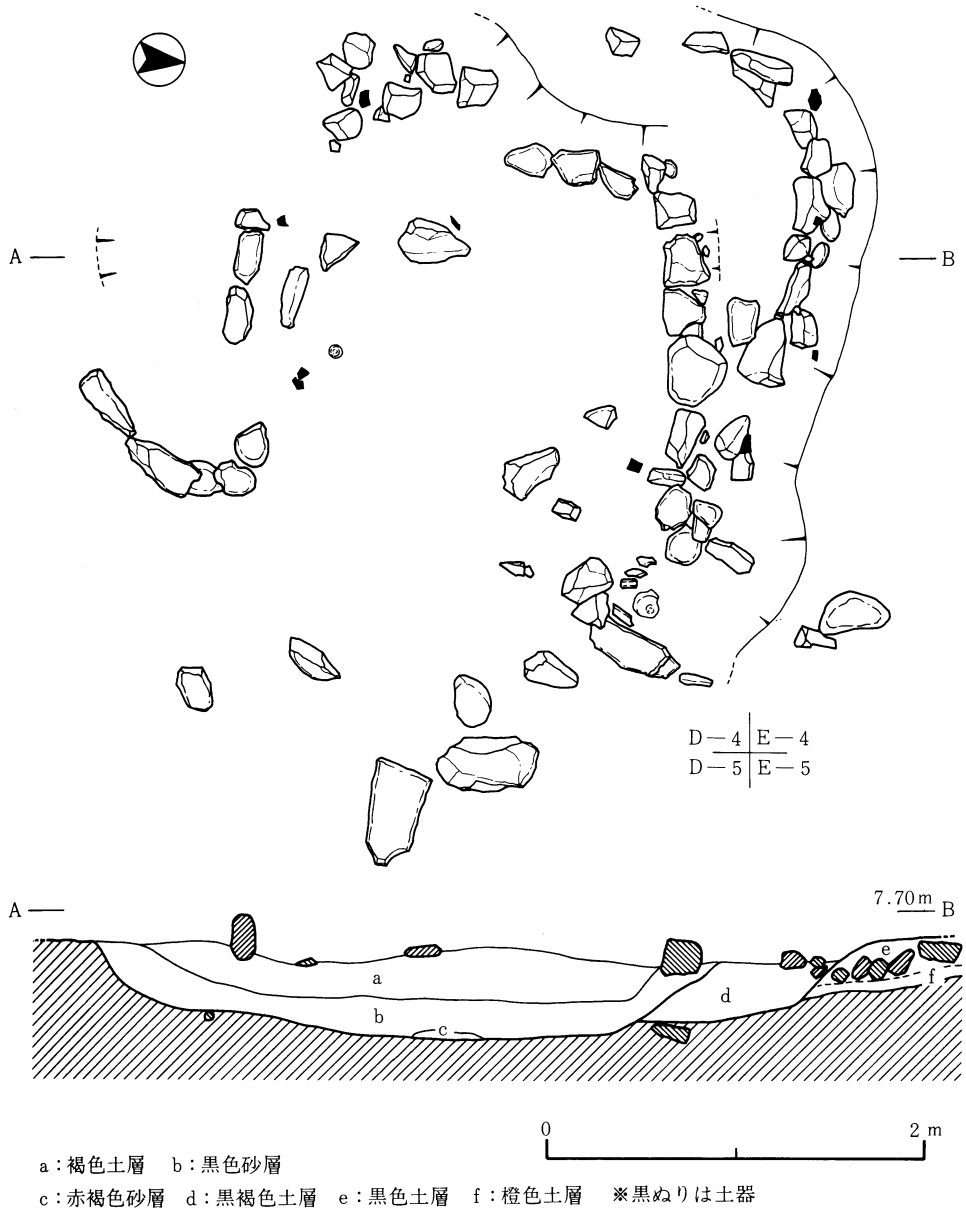




遺物包含層

焼土

第 3 図　地層断面図



第4図　1号・2号石組遺構

そこから北側に枝状に直角に延びる2列（長さ約1.5m）の石組とからなる。大小さまざまな石が使われており、一部黄褐色土を掘り込んで石を据えた部分が確認された。E－5区東側では、黄褐色土が砂の上にのっており、その上に石が据えられた状態であった。これがある種の整地を意味するのか、流れ込みなのか判断し難い。また、石組の範囲内には

遺物はほとんど検出されなかった。住居そのものというより、住居に関連する何らかの外部施設としてとらえた方が妥当であろう。

4号遺構（図版３上）

Ｅ－５区第13層下面より検出された。推定プランは、長径約3.5ｍ・短径約２ｍの楕円形である。ほぼ中心部には、炭まじりの黒褐色をした砂の広がりが確認された。

3．焼礫の集積した遺構（図版３下）

火を受けた礫は少数ながら各層にわたって点在する。しかし、それらの特に集中し累積されているものが、Ｅ－７区第６層下部とＤ－５・Ｄ－６区第14層下部から検出された。

第６層のもの（図版３下）は５cm程の丸味を持った焼礫を主とし、長径1.5ｍ・短径１ｍ程のいびつな楕円状に集積されていた。その厚さは６～７cm程で、下面にも顕著な凹みはみられなかったが、遺構内には灰・炭を混えた黒褐色土が広がり、ビーチロック状に固結した部分が認められた。礫の間からは、小形二枚貝・骨片・土器片が少量検出された。

第14層のものは、直径約1.2～1.3ｍ程の円形を呈する。皿状の焼土の上に焼礫がのった状態で検出された。焼土の厚さは５～10cmで、礫は5～15cm程のものが主であった。範囲内からは少数の土器片と貝が検出された。

これらの遺構の性格は明らかではないが、可能性の高いものとしてアースオーブンなどが考えられよう。

Ⅵ．遺物

1．土器

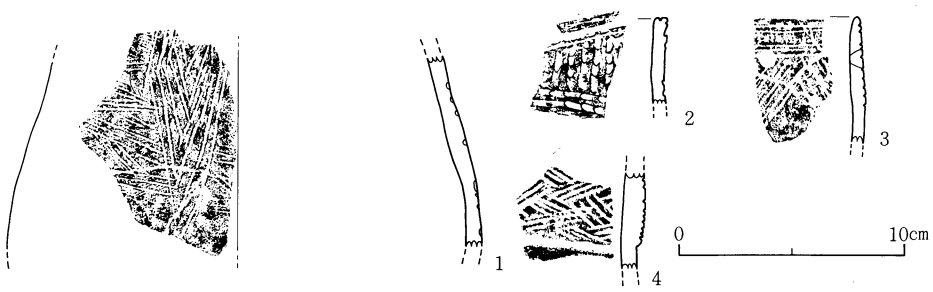
出土土器は多彩であるが、各文化層毎に成形・組成などについての特徴が見られる。ここではそれらを大まかに次のような類・種を用いて記述する。

※器形

Ａ類：深鉢・甕に類するもの

Ｂ類：鉢に類するもの

Ｃ類：浅鉢・皿に類するもの



第5図　第14層出土土器

D類：壺に類するもの

底部

※土器の質

ⓐ種：軟質で軽い・多孔質で吸水性に富む・雲母細片を多量に含むなどの特徴を持ち、ほとんどが黄褐色を呈する。宇宿上層式に代表される。

ⓑ種：堅緻で重く、砂粒・雲母片を少量含む。

暗褐色・黒褐色のものを中心とする。

ⓒ種：胎土の質はⓐ種に近いが、より硬質で、雲母片の量が少なく、やや重みのあるもの。

黄褐色・暗褐色のものが多い。

第14層出土土器（第5図）

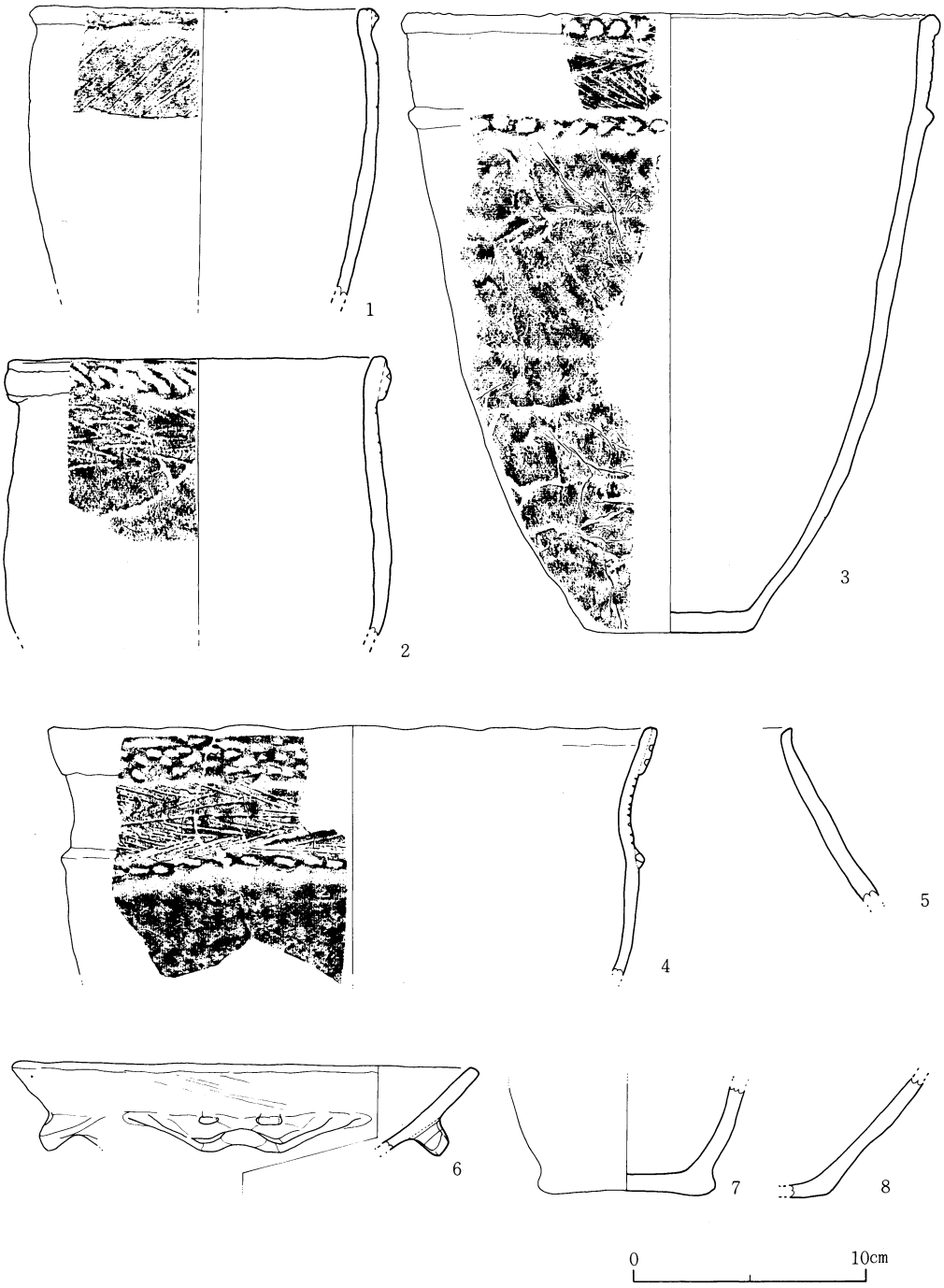
第14層の土器は、いわゆる嘉徳Ⅰ・Ⅱ式に属するが器形を復原できる資料に乏しく、図示できたものは全てA類に属する。

有文土器には押引文を基調としたもの(2)・沈線による編カゴ状の文様を施したもの(4)・鋸歯状の文様を基調としたもの（1・3）などがある。これにはⓑ種が多い。

一方、無文土器片にはⓐ種が多く、壺形かと思われるものを含む。

調整は一部に条痕の見られる他はほとんどがナデによるものである。底部は平底のみでⓐⓑⓒ種いずれもみられる。

なお、第14層の下、間層をはさんだ第17層から少量の土器細片が検出されている。有文のものは二点で、一つは沈線のみ、もう一つは沈線と爪形文を組合わせたものである。いずれもⓑ種である。第14層の土器に近似するが詳細は不明である。



第 6 図　第13層出土土器

第13層出土土器（第６図）

当層の出土土器はＡ・Ｃ・Ｄの３類と底部に類別される。

○Ａ類（１～４）

平縁の有文土器を主とし、凸帯と沈線の組合せをその特徴とする。凸帯は口縁部に上・下二条めぐらされるものと、口縁部上端に一条めぐらされるものがあり、その上に押引き様の文様や短沈線が施される。凸帯間や凸帯下には沈線による文様が施されるが、これには羽状のもの（２・３・４）、斜線を連続するもの(1)などがある。なお、いわゆるカマボコ口縁に近いものも出土している。これらはⓑ種で、ナデ調整を施したものが多い。

○Ｃ類（６）

当層出土のＣ類には、平縁で外耳を持つものがある。外耳は横に平たく二つの孔をもっている。

この土器はⓒ種で内外面ともにヘラ磨きが施され、作りは丁寧である。

○Ｄ類（５）

無頸に近い無文土器がある。口縁部はわずかに外反するが、その口径は、胴部径よりはるかに小さい。この土器はⓐ種に属する。

○底部（７・８）

全て平底であるが、くびれるもの(7)とそうでないもの(8)がある。これはⓑ種(8)とⓒ種(7)がある。

第11層出土土器（第７図）

第11層は当遺跡で最も多く土器を出土した。

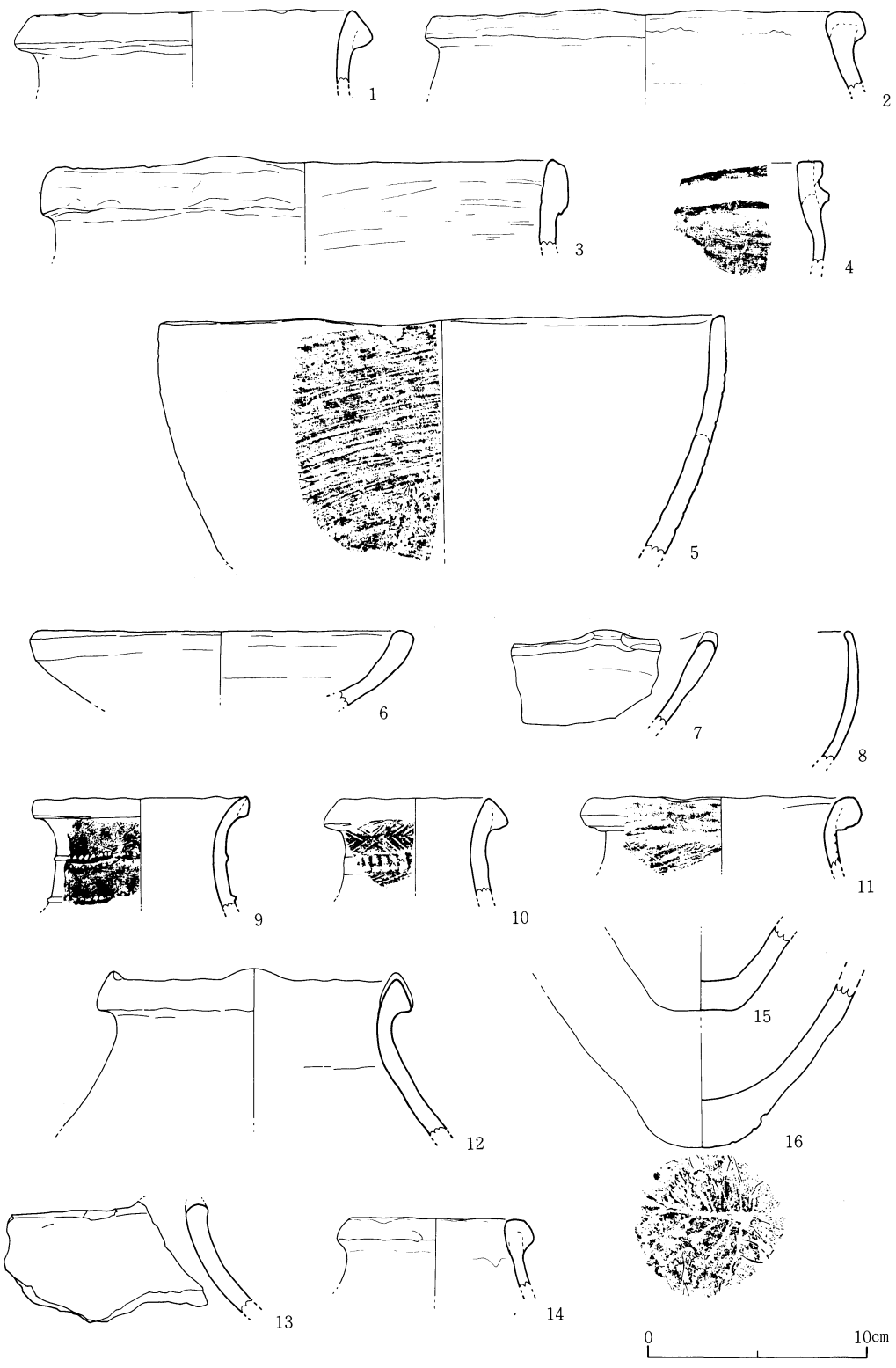
○Ａ類（１～４）

本層のＡ類は文様を施さないのが特徴である。口縁部二条の凸帯をめぐらしている例(2)など、少数を除いて、口縁部断面が三角形に肥厚するもの(1)とカマボコ形に肥厚するもの（２・３）に大別される。

これらには、ⓐ種が多く、ナデ調整が多用されている。

○Ｂ類（５・８）

Ｂ類には、外器面全体に条痕を施したもの(5)がある。ⓑ種に属し、内器面はナデ調整である。外器面には炭化物の付着がみられる。また８は器壁が薄くⓒ種に属する。



第7図　第11層出土土器

○C類（6・7）

C類には口縁部に突起を有するもの(7)とそうでないもの(6)がある。ⓒ種である。

○D類（9～14）

バラエティに富むが、大きく有文のものと無文のものとに分けられる。

有文土器には口縁部断面が三角形に肥厚するものとカマボコ形に肥厚するものがある。文様は、刺突文凸帯と沈線のもの(10)、刺突文凸帯だけのもの(9)、沈線だけのもの(11)などに分けることができる。

無文土器は、口縁部断面が三角形に肥厚するもの(12)・カマボコ形に肥厚するもの(14)・肥厚しないもの(13)・口縁下部に段を有するものなどに分けられる。この中には、口縁部に山形突起を持つもの（12・13）がある。

無文土器にはⓐ種が多く、有文土器にはⓑ・ⓒ種が多い。

○底部（15・16）

尖底と平底がある。（前回の調査では丸底も出土している。）

尖底(16)は最下部に粘土を貼付し、一段盛り上がった形態をなす。平底(15)は他層のものに比べて底面積が小さい。

なお、16には木の葉の圧痕がある。15はⓐ種、16はⓑ種であるが、尖底・平底それぞれにⓐ・ⓑ両種存在する。

この他に褐色の磨研土器の破片が出土している。5とともにこの層では他とかけはなれた印象をあたえる。

第9層出土土器（第8図）

第9層から出土した土器は少ない。ここではA類・D類・底部を図示した。

○A類（1～3）

口縁下部にわずかな肥厚部を持つもの(1)、口縁下に三日月形の外耳を貼付したもの（2・3）などがある。前者は沖縄のカヤウチバンタ式に類似する。後者のうち2は特に大形であり、内外面に炭化物の付着が著しい。この三日月形外耳の他に、ピーナッツ殻状の外耳を有するものもある。また、胴が張り、しまった頸部からそのまま口縁へと続く器形のものがある。他に山形口縁のもの素口縁のものも見られる。これらにはⓑ・ⓒ種が多い。

○Ｄ類（４）

肥厚した波状口縁を有するもの(4)がある。波状部がどのように続いていくのかは不明である。ⓐ種に属する。

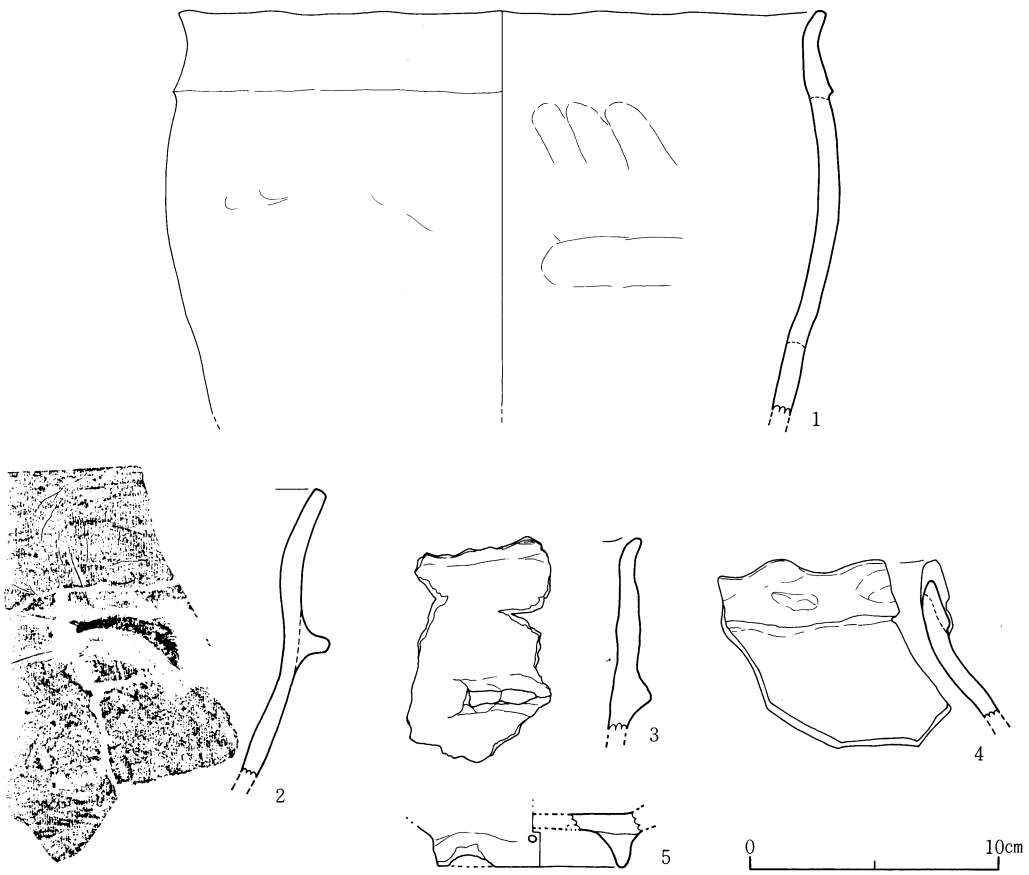
○底部（５）

台をなすものがある。脚部には穿孔がなされており、ⓒ種に属する。なお前回の調査ではＣ類や丸底の存在が確認されている。

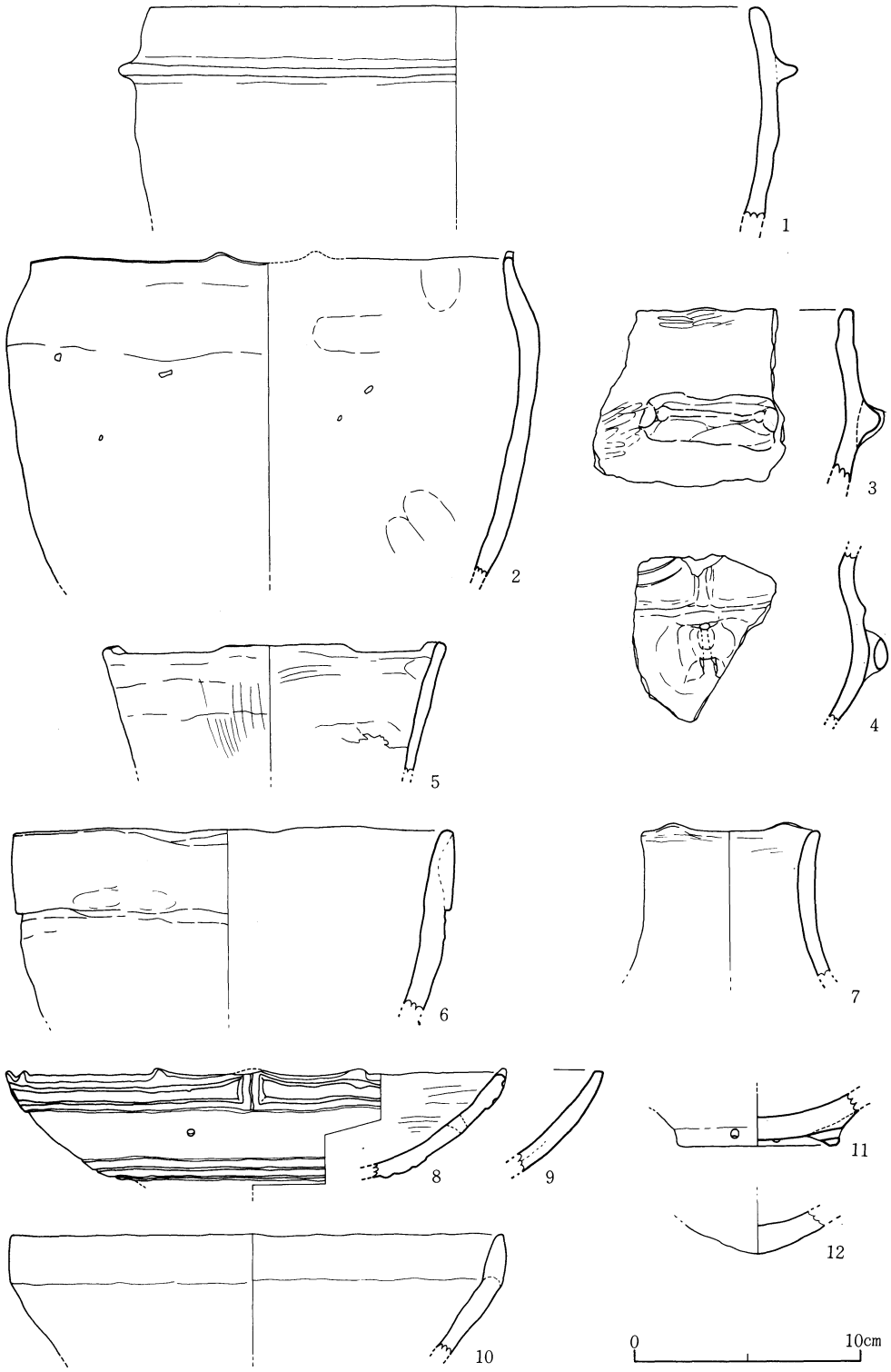
第６層出土土器（第９図）

○Ａ類（１～３・５）

第９・11層のＡ類と同様に装飾性に乏しい。ほとんどが平縁と思われるが、素口縁の他に特徴的なものとして、口縁下部に凸帯を一条めぐらせたもの(1)、ピーナッツ殻



第８図　第９層出土土器



第9図　第6層出土土器

状の外耳を貼付したもの(3)、口縁に山形突起を有し、器壁の特に薄いもの(5)、口縁部をやや内傾させて屈曲部を作り、突起を有するもの(2)などがある。これらは、5がⓐ種で特異な他は、ⓑ種のものが多い。調整はヘラ磨き(5)・ヘラ削り(3)・ナデなど多様で、炭化物の付着がみられるもの(1)がある。

○B類（4・6）

平縁で口縁部を少し肥厚させたもの(6)、口縁部に凸帯を縦・横に作り出したもの(4)などがある。4には穿孔された丸形の外耳がある。これはⓑ種に属する。

○C類（8～10）

有文のものと無文のものとがある。有文のもの(8)は口縁部と胴部に沈線の施された幅広い凸帯を有する。口唇部には山形突起が、胴部には穿孔があり、軽く研磨されている。無文のものには素口縁の黒褐色の磨研土器(9)と口縁部に屈曲部を作り出した黄橙色の磨研土器(10)などがある。これはⓒ種に属するものが多い。

○D類（7）

比較的長い頸部をもった磨研土器がある。口縁部には山形突起を有し、研磨は外器面全体になされ、口縁部内部にまで及ぶ。ⓒ種に属する。

○底部（11・12）

台をなすもの(11)と尖底(12)がある。（前回の調査では丸底・平底も出土している。）11の台部には二ヶ所に穿孔が認められる。この孔は11がD類であることを示唆している。

11はⓐ種、12はⓒ種であるが、台付のものはほとんどがⓐ種に属する。

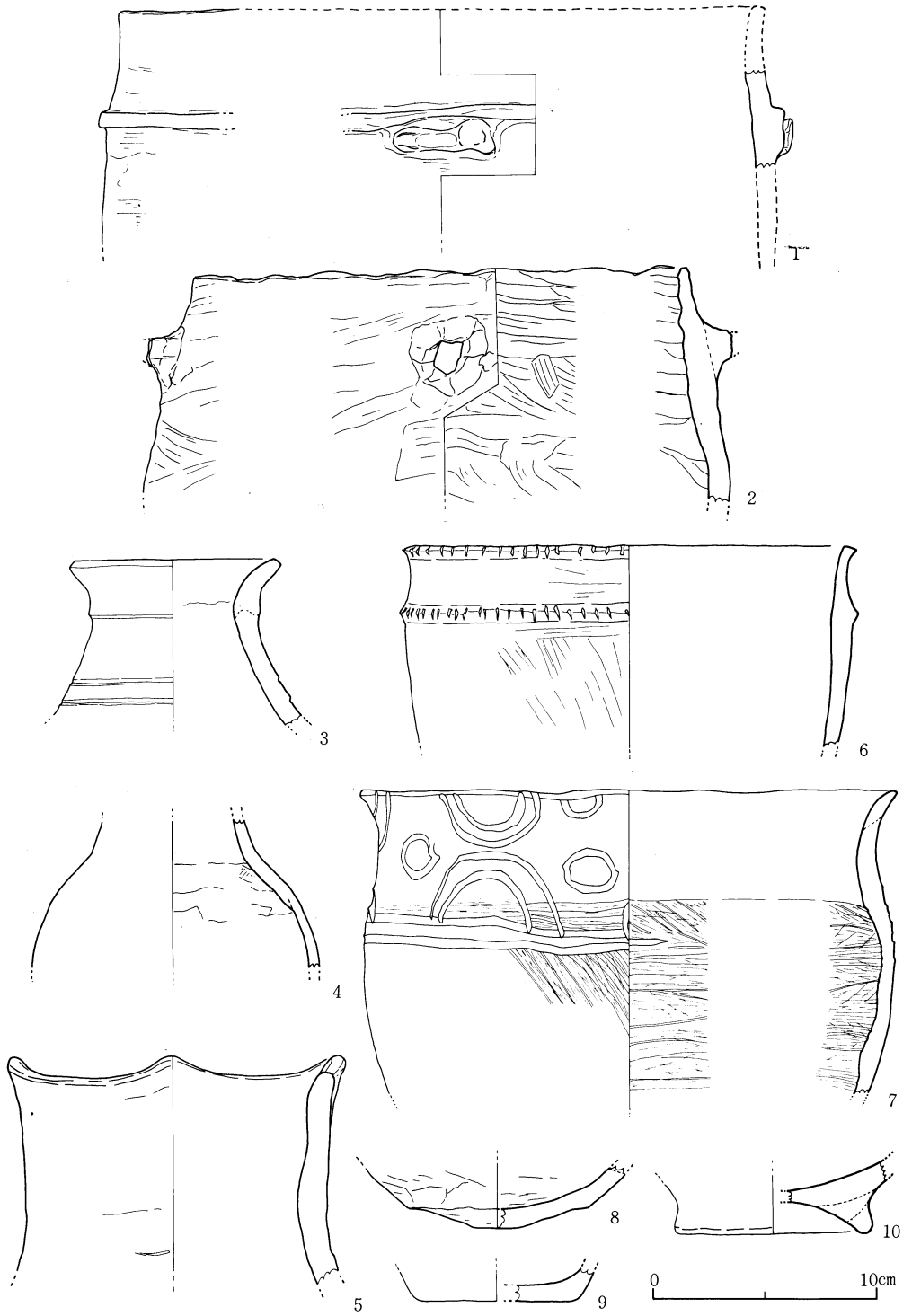
第5層出土土器（第10図）

○A類（1・2・6・7）

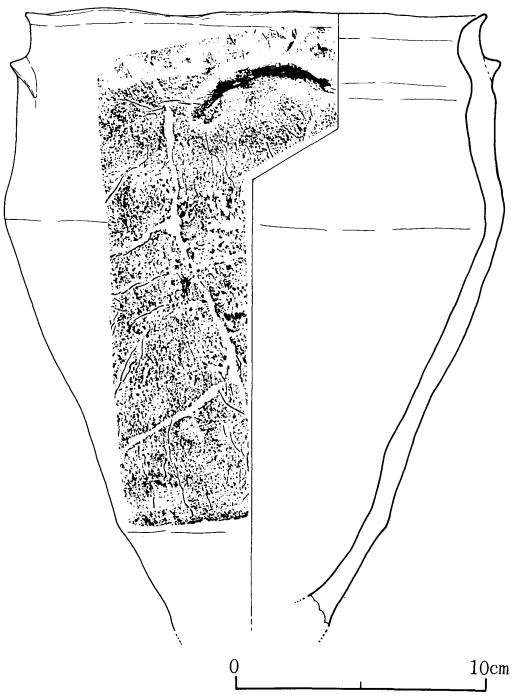
多種多様であり、口縁下部に凸帯をめぐらせたもの・その凸帯下にリボン風の外耳をつけたもの(1)・つまみ様の外耳をつけたもの(2)などの他、口縁部から頸部にかけて平行沈線文・円文・半弧文を描いたもの(7)・口縁部上下端に刻み目の入った凸帯をめぐらすもの(6)などがある。6は九州の刻目凸帯文土器に類似する。

これには、ⓑ種が多く、調整は、ナデ・ヘラ削り(2)・ヘラ磨き(6)・条痕を残すもの(7)など多様である。一般に作りはあらく、粘土の接合痕の残る例が多い。

○B・C類



第10図　第５層出土土器



第11図　第４層出土土器

無文のものがあるが、小片が多くＢ類・Ｃ類の区別は困難である。ⓐ種が大半である。

○Ｄ類（３～５）

比較的長い頸部から外反する口縁部へと続く器形の丹塗磨研土器(3)・口縁部に山形突起を有するもの(5)・胴部が球状に張り、頸部が比較的短くなると思われるもの(4)などがある。山形突起を有するものには口縁の上面形が方形になるものがある。３は口縁に段を、頸部に一条の凸帯を有するが、いずれも削り出しによるものと思われる。丹の塗布は外器面全体と口縁部内部に行なわれている。この土器は外見上の特徴が九州における弥生時代前期の土器（板付式）に以ており、当層では前記の６とともに注目される。これらにはⓒ種が多い。

○底部（８～10）

台付のもの(10)・平底(9)・尖底(8)の３種がある。この中で台付のものはＤ類に伴うと思われる。10はⓐ種、９はⓑ種、８はⓒ種に属するが、台付のものはむしろⓒ種が主流である。

また、第３層と第５層の間層（第４層）下部からほぼ一個体分の土器がまとまって出土している。（第11図）

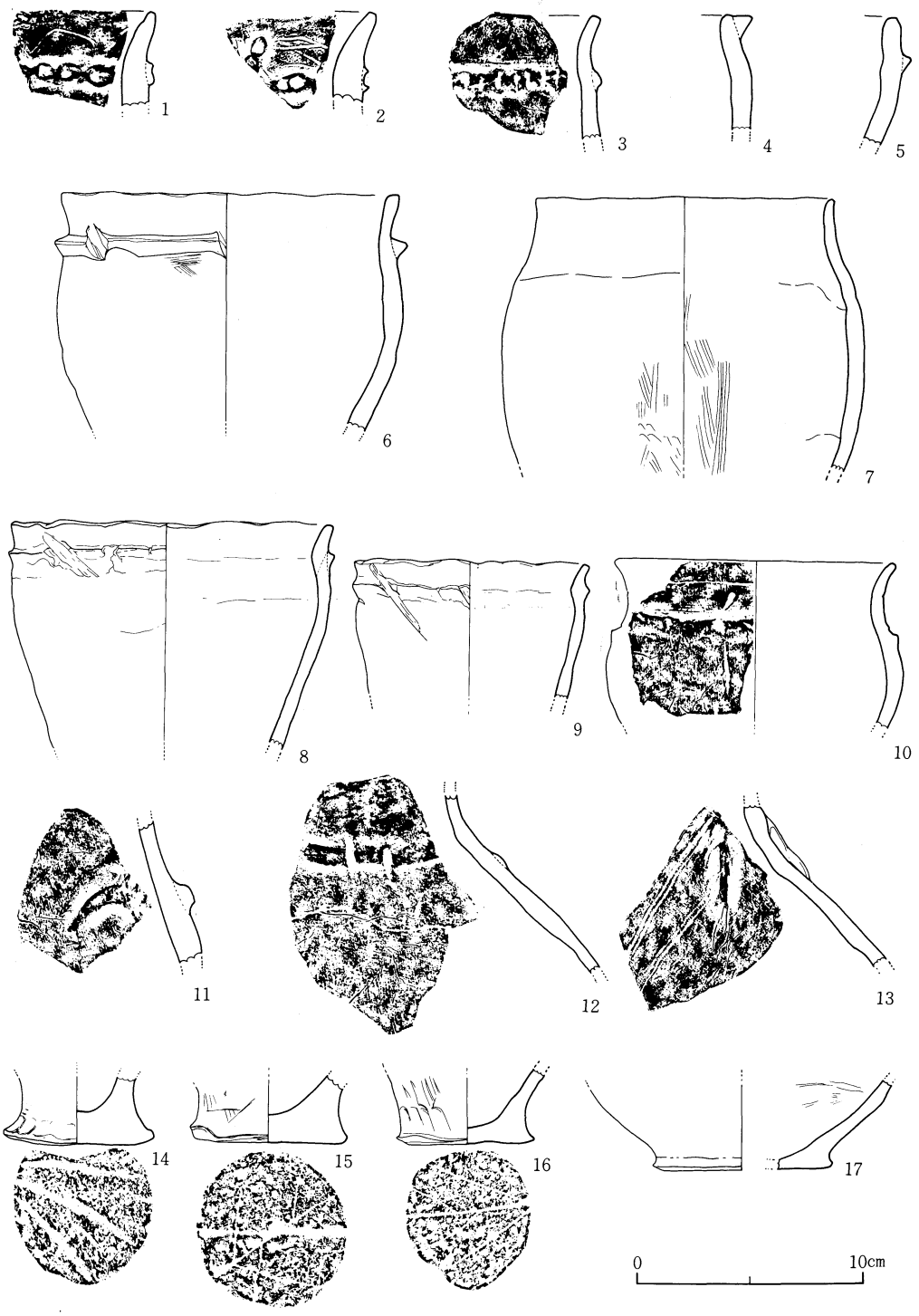
底部を一部欠失しているがおそらく尖底であったと思われる。口縁下には三日月形外耳を月し、口縁部から胴部にかけては炭化物の付着が著しい。ⓑ種に属する。

第３層出土土器（第12図）

当層の出土土器は、Ａ・Ｂ・Ｄ類・底部に類別し得た。

○Ａ類（１～４、６～９）

ほとんどが平縁であると思われるが、口縁下部に凸帯を持つものと持たないものに



第12図　第３層出土土器

分けられる。凸帯を持つものには、凸帯上にあらい刻み目を間隔をとって施すもの（６・８・９）、反対に密に刻み目を施すもの(3)、凸帯上に押引き風の点文を、その上側、即ち口縁上部に浅い沈線を施すもの（１・２）、凸帯を口縁部上端に貼付し、口縁端をフラットにしたもの(4)などがある。凸帯を持たないものには、口縁部に若干の屈曲を有するもの(7)がある。

これらはⓑ種のものが多く、すすや炭化物の付着したものがある。

○Ｂ類（５・10）

口縁下部に凸帯を一条めぐらせただけのもの(5)・口縁部にあらい刻み目の入った凸帯をめぐらし、沈線を施すもの(10)などがあり、また炭化物の付着が見られるもの(10)がある。ⓑ種が主である。

○Ｄ類（11～13）

胴部の最大径に対して口径が著しく小さいものが多い。この中には頸部の凸帯にあらく刻み目を入れたもの(12)、凸帯と沈線を組み合わせたもの(13)、三日月形の外耳を貼付したもの(11)などがある。ⓐ種とⓒ種が多い。

○底部（14～17）

すべていわゆる「くびれ平底」である。（前回の調査では台付土器も出土している。）

これらはほとんどが底面に木の葉圧痕を持っている。14～16はいずれもⓑ種、17はⓒ種でⓑ種が卓越する。

以上、出土土器について述べたが、これらの一部は従来唱えられている嘉徳ＩＡ式（第５図２）・嘉徳ＩＢ式（第５図３）・嘉徳II式（第５図４）・西繩西洞式（第６図３等）・宇宿上層式（第７図１～３・12・14等）・喜念Ｉ式（第７図９・10等）・兼久式（第12図）などの諸型式に該当する。

２．土製品

有孔土製円版（第13図）

第６層より出土した明黄褐色を呈する直径７㎝強・厚さ約１㎝の円版である。中央部には高さ１㎝程のつまみ状突起があり、裏面へ貫通する穴が穿たれ、表（つまみ側）には喰い違いや行き詰りのある同心円文を、裏には蕨手風渦巻文を組合わせた文様が刻

まれている。文様は両面とも器面を四分割して描かれている。

特に渦巻文などは隼人楯やトカラ列島のボゼの文様を連想させるという者もある。また行き詰り同心円文については、未開族の間に多い僻邪の迷路文との共通性を指摘する者もある。形状は紡錘車に近いが[註②]、その使用目的は今のところ不明である。

土版（図版４下）

粘土塊をただ平たく引き延ばした様な用途不明の土製品である。片面に大きな木の葉の圧痕、その裏面に指頭圧痕を残すものが多い。

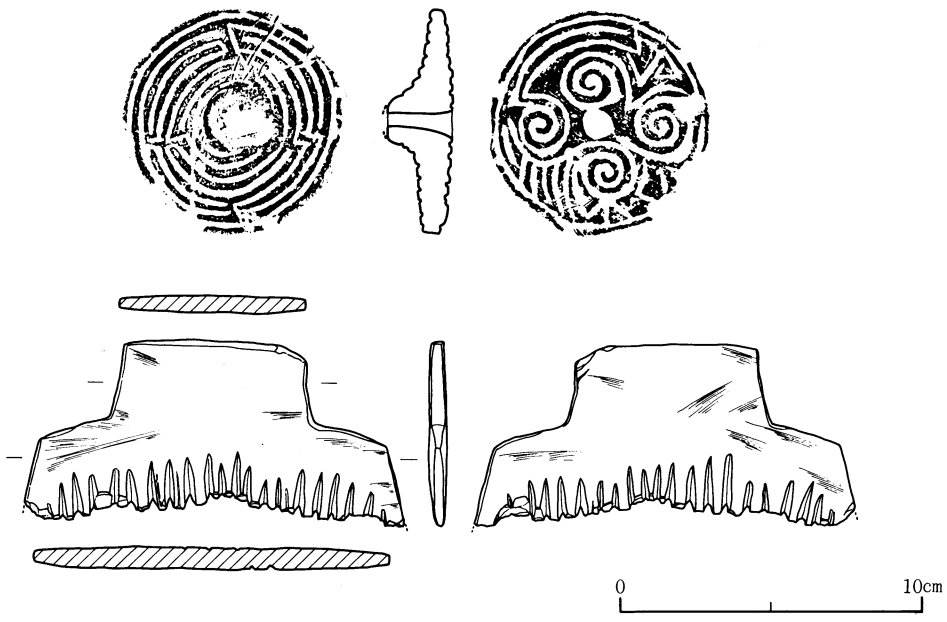
第５層から第11層まで多く出土している。ほとんどが破砕されて出土しているが、復原形は直径30cm程の円版状のものと思われる。

３．石器

石器は各文化層より検出され、器種は比較的多岐にわたっている。

石鏃（第14図１～３）

石鏃は第６層より３点出土した。いずれも打製。黒曜石製のものが２点（１・３）



第13図　有孔土製円版・櫛形石製品

石英質のものが１点(2)である。１点は基部を欠失するが、完形の２点は基部に抉りがある。

石斧（第14図）

第11層より１点出土した。両刃であるが身に強い反りがある。研磨は刃部周辺、側面に強く、その他の部分には打剝痕が残されたままである。刃端には使用痕がみられる。

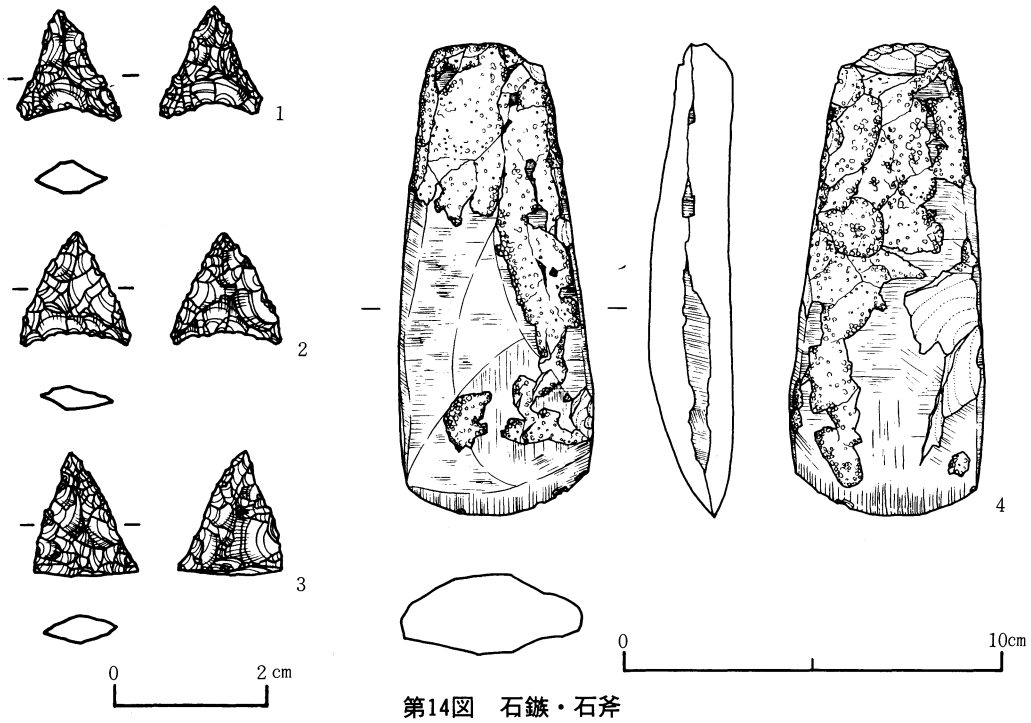
磨石・凹石・敲石（図版５上 １・３～５）

これらはいずれも10～15cm程の円形や楕円形の礫をそのままか、一部整形して利用しているもので、30点ある。まんべんなく出土したが特に第６・第11層に多い。

磨石・凹石・敲石は互いの用途への転用・兼用が多く、明確な分類は困難であるが、中でも敲き痕を残すものが22点と最も多い。

ほぼ中央部に凹みを持つものは、11点あるが、いずれも敲きによって浅い凹みが形成されたもので凹みを意図して作られたものではない。

また、磨面の判別は困難であるが、磨石として用いられたと思われるものは10点程ある。



第14図　石鏃・石斧

石皿（図版５下）

磨られた面を持つ盤状の石製品の破片は第６層を中心に12点出土している。中には30×40cm程の大形品もある。いわゆる石皿であるが、比較的軟質の石材を利用したものが多い。

クガニ石（図版５上 2）

クガニ石[註③]は、第６層１号石組内より１点、第13層より２点表採で１点出土している。いずれも、比較的大形の卵形礫に調整を加えたものであるが、本遺跡の場合、敲打の後に全体にわたって敲打痕を消すような研磨がなされているものがある。

有溝石器（図版６上）

これは第13層より出土した。明黄褐色の平たい軟質の石材に複数の溝が交錯して走っている。溝の幅は約４㎜。玉砥石の類で、貝器の研磨に用いられたとされている[註④]。

櫛形石製品（第13図）

粘板岩を用い、平面形は「櫛」形を呈した全面磨製の品である。第６層より出土した。片方には「歯」が約20本、一種の擦り切り技法で作られている。「歯」は全て磨耗痕を残して欠失しており、原状は推測し難い。使用目的等についても、関係者の間では繊維に関係するものか、とするものが多い。

この石製品や前述の土製円版はいずれもこの地方では初見のものであるが、両者とも第６層より出土している点が気にかかる。

この他にも、使用痕ないし加工痕をとどめてはいるが特定の名称を与え難い遺物が出土している。中でも粘板岩を薄く剝離しただけのもの（図版６下）は各層より比較的多く出土した。これらの剝片はその鋭い縁辺部をスクレイパーのようにして使用さと思われる。

４．骨・貝製品

貝製品は、貝刃・貝匙を主とするが、他に貝輪・貝玉といった装身具も若干みられる。

貝刃・貝匙（図版７・９上）

いわゆる貝刃（図版９上）は、ヤコウガイの蓋の縁辺部を打ちかいて刃器にしたとされているもので、貝匙（図版７）はヤコウガイの外殻を利用したものである。いず

れも20点以上にのぼるが、貝刃は第３・第６・第11層で、貝匙は第３・第５・第６層に多くみられる。

貝輪（図版８）

貝輪は大形の巻貝を使用したと思われるので第６層・第11層・第14層よりそれぞれ１点ずつ出土した。

第６層のもの（図版８右）は半分を欠失する。内面の一部を残し、きれいに研磨してある。第11層のもの（図版８中）も、一部を欠失するが、別の端はきちんと整形され、穿孔してある。同様のものを環状につなぎ合わせて使用したものであろうか。第14層のもの（図版８左）には２ヶ所に穿孔があり、外縁に切目が入る。外観から一応貝輪として取り扱った。

有孔貝製品（図版９下）

第６層と第13層から１点ずつ出土した。

第６層のものは小形のイモガイを横切りにし、殻頂部に穿孔したものであり、第13層のものは小形のイモガイの殻頂部にそのまま穴をあけたものである。いずれも全体に研磨が加えられている。

骨製針（図版９下）

第６層から出土したもので全面になめらかな調整が加えられている。現存長11cm。基部の断面は長方形を呈するが先端部では楕円形を呈する。基部付近には直径４㎜程の孔があり、そこから欠損しているが、針とすれば糸通しの穴であろう。

材質は獣骨であると思われるが、エイの棘の可能性もある。

付近住民に印象を尋ねると魚網針とする意見、籠細工の際の目貫き針とする意見に賛成者が多かった。

Ⅶ．おわりに

土器について

各層ごとの土器の様態をキーワードでまとめると以下のようになろう。

第14層――いわゆる嘉徳Ⅰ・Ⅱ式を含む。

第13層――いわゆる面縄西洞式を含む。

C類・D類土器（第14層から当層にかけて）・外耳土器の出現。研磨技法。平底卓越。

第11層――いわゆる宇宿上層式・喜念Ⅰ式を含む。条痕文土器・磨研土器の存在。D類土器の隆盛。尖底の出現。

第9層――カヤウチバンタ式類似土器の存在。台付土器の存在。外耳盛行。

第6層――磨研壺の出現。外耳・山形突起盛行。

第5層――刻目凸帯付土器・板付式類似丹塗磨研壺の存在。外耳・山形突起・台付土器の盛行。

第3層――いわゆる兼久式土器を含む。くびれ平底の盛行。

これらの諸事象は奄美の土器文化の変遷を促える上で重要な指標になる。特に第14層・第11層・第5層の持つ意義は大きい。

第14層から出土した嘉徳Ⅰ・Ⅱ式は縄文時代後期後半に比定されるものである。また宇宿上層式・喜念Ⅰ式は、タチバナ遺跡[註⑤]で九州の黒川式との共伴が確認されており、これによって第11層は縄文時代晩期前半に相当するものと思われる。磨研土器・条痕鉢形土器の出土もこれに見合うものであろう。また第5層の土器は九州の土器との類縁性が強く感じられる。刻目凸帯付土器・板付式類似丹塗磨研壺の存在は弥生時代前期の様相に通じるものがある。これらのことから、爾余の層もその属する時期を極めて限られた範囲で補捉することができよう。（時代の変遷については巻末にC^{14}測定結果を掲げてある。是非参照され度い。）

またこの他にも土器そのものについてもいくつかの新知見を得ることができた。

一つは壺形土器の出現に関するものである。奄美において壺形土器は喜念Ⅰ式以降に現われるとされているが、それ以前に属する第13層で無文のものが、第14層で同じく無文で壺形かと思われるものが確認されたことは意義深い。最近、住用村サモト遺跡[註⑥]でも面縄西洞式を主体とするⅢ層からこのタイプのものが出土していることは注目される。沖縄で荻堂式期には無文壺形土器が存在する[註⑦]ことから、それらとの関係も考慮しなくてはならないであろう。しかしまだ資料が充足されたとはいえず不明な点が多い。系統・出現の背景などの解明は今後の課題である。

二つめは外耳土器の出現に関するものである。外耳土器の当遺跡における初現は第

13層であるが、これは奄美においては最も時代の遡る資料であろう。上位の層においてA類に粗雑な実用感に乏しい外耳を貼付する傾向が強いことを考えると、皿形土器に丁寧な作りの実用感ある大形の外耳を貼付した点は注目される。

三つめは尖底土器の木の葉圧痕に関するものである。これは第11層から出土したものであるが、従来奄美において木の葉圧痕は平底の兼久式に多く見られ、製作時に敷物として使われた時に残ったものとされている。もし、この尖底の圧痕が同様に製作時のものであるとすれば製作技術を考える際に有効な資料となろう。

遺構について

第6層より検出された1・2号石組遺構は住居址と思われるが、この様な形態を持つものとしては奄美では最も新しい時期に属する例と思われる。

また第3層から検出された平地住居址と思われる遺構は、兼久式期における初の検出例である。

沖縄諸島において平地住居が定着するのは貝塚時代後期からである。それもナガラ原西貝塚やアカジャンガー貝塚のように初期には見られないことから考えると、奄美における住居の変遷は、沖縄諸島と軌を一にする可能性があると言えよう。

註 ① 龍郷町教育委員会・奄美考古学会『手広遺跡』1984年2月
② 中間研志 「紡錘車の研究」『石崎曲り田遺跡Ⅲ』福岡県教育委員会 1985年
この中では縄文時代後期から弥生時代にかけての同様の土製品を紡錘車として促えている。
③ 白木原和美 『クガニイシ』熊本大学法文論叢第41号1978年
④ 鹿児島県教育委員会『長浜金久遺跡』1985
⑤ 熊本大学考古学研究室 『タチバナ遺跡』1979年 『タチバナ遺跡(2)』1980年
⑥ 熊本大学考古学研究室 『サモト遺跡(2)』1984年
⑦ 知念勇「伊波式・荻堂式土器」『縄文文化の研究6 続縄文文・南島文化』雄山閣1982年など

〔付説〕

Ⅰ．動物遺存体　（木村幾多郎）

本遺跡より発掘された動物遺存体（貝類・魚骨を除く）遺存骨の殆どは、ウミガメ腹甲・背甲板破片で、他にリュウキウイノシシが検出されているのみである。第３層から第14層の各層より遺存骨が検出されているが、第５層が全ての点で他の層をうわまわり、ウミガメ遺存骨の殆どは本層よりの出土である。

1．イノシシ（表１・２）

イノシシ遺存骨で部位の同定されたものは表１に示す。各部位遺存数よりする推定最小個体数は、歯牙よりすると 第３層 ２体、第５層 ５体、第６層 １体、第11層１体の合計９頭分の遺存骨、四肢骨よりすると 第３層 １体、第５層 ３体、第６層 ２体、第11層 １頭の合計７頭分の遺存骨が検出されている。イノシシ遺存骨の各計測値は、成獣でも小型であり、リュキュウイノシシと推定される。

第３層

２頭分下顎骨が検出されている。現在接合不可能な部分が存在するが、おそらくは完形になるものと思われる。個体ａは、左右とも犬歯歯槽部で破損しているが、右側犬歯は残存しており、雄獣である。咬耗はM_1は歯頭部付近まで、M_2は象牙質が大きく点状に露出し、M_3は象牙質が各咬頭部が小さく点状に露出する。成獣であるが、P_2－M_3歯列長7.8cmと小さい。個体ｂはM_3が半分以上骨体内に埋没している。M_1は象牙質が広く露出し、M_2は各咬頭部のエナメル質が磨滅している。歯牙咬耗、萌出よりすれば生後１年以内の個体である。

四肢骨では、橈骨(r.) の骨体部片が確認されているにとどまる。

第５層

５頭分の下顎骨が確認された。個体ｃは、乳歯の残る個体で、M_1が萌出しており、すでにエナメル質に咬耗が認められる。生後６ヶ月程の幼獣である。個体ｄは左右下顎骨が遺存する。犬歯よりすれば雌獣である。左右ともP_3・P_4の間で割れ、下顎骨下縁を欠失する。M_3は骨体内にその一部が残る。M_1の各咬頭が広く象牙質露出、M_2の各

咬頭に点状に象牙質が露出、M_3に磨耗は認められない。個体eは右側下顎骨で下顎連合部より残存するが、残存歯槽はP_3-M_3である。P_4の歯槽は閉鎖し、M_2・M_2の咬耗は歯頸部に及び、老獣である。個体fは左右のP_4-M_3の骨体部分が残存する。M_3は骨体内に完全に埋没し、M_1はエナメル質に若干磨耗が認められる。個体gは左側のM_2・M_3の植立する下顎骨で、M_3は半分以上骨体内に埋没する。M_2は部分的に象牙質が露出するが、M_3に咬耗は認められない。

以上より、乳歯を残す個体1、M_3が未萌出または萌出中の個体3、咬耗が歯頸部まで及ぶ個体1の計5体分の下顎骨が確認されているが、上顎骨は、未確認である。

四肢骨の検出部位は表1の通りで、推定最小個体数は3体となる。四肢骨で計測可能なものは少いが、いずれも小さい。

第6層

歯牙の植立した下顎骨は、個体hのみであるが、おそらく同一個体に属すると思われる遊離歯（切歯）が検出されている。C・P_2・P_3が残存植立するが、P_3に咬耗が認められる。

四肢骨は、寛骨臼(r.)付近片、上腕骨(r.)遠位部片2点、頭蓋骨小片が検出されている。

第11層

Cの一部とP_2・P_3の歯槽部の残る下顎骨（r.）が検出されている。四肢骨は、寛骨臼（ℓ.）付近片、脛骨（r.）前縁片、頭蓋骨小片が検出されている。

2．ウミガメ類

ウミガメ類の遺存骨が、各層より検出されているが量的には第5層が他を圧倒する。

第5層

ウミガメ類の遺存骨の殆どは、腹甲各種板の破片である。そのうちの多くは肋骨板で、他に上・中・下腹甲板も認められる。全体の遺存骨量(約2270g)からすると、1頭分のウミガメ類の残存骨であろう。第6層より、アカウミガメかと思われる下顎骨が出土しており、おそらく同種のものであろう。

第6層

肋骨板小片3、下顎骨1が検出されているのだけである。下顎骨はアカウミガメに

類似する。

第9層

肋骨板小片1、指骨の小片1が検出されているのみである。

以上のように、第5層を中心に遺存骨が検出されているが、残存骨量よりすればきわめて少い頭数しか推定できない。

以上のように、貝類・魚類を除く動物遺存体は、イノシシ・ウミガメに限られ、他に小片であるが、海棲哺乳類の遺存骨らしいものが若干認められるにとどまる。

II. 出土貝類一覧表　（表3）

当遺跡から出土した貝類は多量で、種類も同定できたものだけで36科109種と多岐にわたる。以下の表3は、その同定結果と各層における有無を一覧表にしたものである。

III. 出土貝類と民俗　（表4）

手広地区周辺における貝類の呼称・捕獲法・調理方法を一覧表にしたものが表4である。項目で取り上げられている貝は、遺跡出土のものの他に、現在近辺の海で採取できるものを含んでいる。

なお、魚骨についても同定一覧表を掲載する予定であったが、鑑定の折合いがつかず今回は見送ることとした。

IV. C^{14}測定結果　（47頁）

各層にわたり、比較的良質な試料（木炭粒）が得られたので、年代測定を日本アイソトープ協会に依頼した。報告書をそのまま掲載したが、左肩に層の対照表をつけておいた。各数値とも今後の研究の重要な参考資料になり得るものである。

表1　イノシシ遺存骨数量表（II146・V6などは遺物整理番号を表わす）

	Cr.	Mand.	Scap.		Hum.		Rad.		Ul.		Pelv.		Fem.		Tib.		Fib.		cal.		推定個体数	
			r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	下顎骨	四肢骨
第3層		個体a					I 1															
		個体b																			2	1
第5層	II146	個体c	II118		II146	II141	II 9		II 3	II13	II147				II130	II122			II146	II120		
		d	II136			II146		II24·26	II10							II146						
		e	II143						II156												5	3
		f																				
		g																				
第6層	III21	個体h			III13						III14											
					III19																1	2
第11層	V 5	個体i										V 4			V 6							
																					1	1
合計		9	3	0	3	2	2	1	3	1	2	1	0	0	2	2	0	0	1	1		

表2　イノシシ歯牙残存歯式表

	個体	Mand.(R.)										Mand.(L.)									
		M_3	M_2	M_1	P_4	P_3	P_2	C	I_3	I_2	I_1	I_1	I_2	I_3	C	P_2	P_3	P_4	M_1	M_2	M_3
第3層	a	M_3	M_2	M_1	+	+	+	C		I_2	I_1	I_1	I_2	+	+	+	P_3	P_4	+	M_2	M_3
	b		M_2	M_1	P_4			C								+	P_3	P_4	M_1	M_2	((M₃))
第5層	c																m_2	m_3	M_1	+	
	d	(M_3)	M_2	+	+	P_3	P_2	C	+	+	+	+	+	+	C	P_2	P_3	P_4	M_1	M_2	(M_3)
	e	M_2	M_3	+	×	+		+													
	f	((+))	M_2	M_1	+													+	+	(M_2)	((M₃))
	g																			M_2	(M_3)
第6層	h				+	P_3	P_2	C													
第11層	i														+	+	+				

（註）　+　歯槽部残存
(( ))　骨体内完全埋没
( )　骨体内部分埋没

表3　出土貝類一覧表(1)

綱	科	種		各遺物包含層に於ける出土の有無						
				3	5	6	9	11	13	14
腹足綱	ミミガイ科	イボアナゴ	*Haliotis varia*	○	○	○		○	○	○
	ツタノハガイ科	オオベッコウガサ	*Cellana testudinaria*	○	○	○		○	○	○
		カレハガサ	*Penepatella vidua*	○	○	○		○	○	○
	ユキノカサ科	キクコザラ	*Collisella langfordi*	○						
		ウノアシ	*Pattelloida saccharina*					○		
		リュウキュウカモガイ	*Collisella luchuana*						○	
		リュウキュウアオガイ	*Patelloida striata*						○	
	ニシキウズ科	ギンタカハマ	*Tectus pyramis*	○	○	○	○	○	○	○
		サラサバティ	*Tectus maximus*	○	○	○	○	○	○	
		ダルマサラサバティ	*Tectus niloticus*	○	○	○		○		○
		ハワイウズ	*Trochus sandwichensis*	○	○	○		○		
	リュウテン科	チョウセンサザエ	*Turbo argyrostoma*	○	○	○	○	○	○	○
		ヤコウガイ	*Lunatia marmorata*	○	○	○	○	○	○	○
		ウラウズガイ	*Astralium haematragum*	○	○	○		○		○
	アマオブネ科	アマオブネ	*Nerita albicilla*	○	○	○		○	○	○
		ニシキアマオブネ	*Nerita polita*	○	○	○		○	○	○
		イシダタミアマオブネ	*Ritena helicinoides*	○		○				○
		イナズマカノコ	*Vittina paralella*							○
	ウミニナ科	ヘナタリ	*Cerithideopsilla cingulata*	○	○	○				
	タケノコカニモリ科	オニノツノガイ	*Cerithium nodulosum*	○				○		
		コベルトカニモリ	*Cerithium kobelti*					○		
		キイロカニモリ	*Contumax citrinus*							○
	スイショウガイ科	スイショウガイ	*Strombus isabella*					○		
		マガキガイ	*Conomurex luchuans*	○						○
		スイジガイ	*Harpago chiragra*	○	○	○	○	○	○	
		クモガイ	*Lambis lambis*	○	○	○			○	
		ウラスジマイノソデ	*Euprotomus vomer*	○						
	タカラガイ科	ハナビラダカラ	*Mohetaria annulus*			○			○	
		ハナマルユキダカラ	*Ravitrona caputserpentis*	○	○			○	○	
		ハチジョウダカラ	*Peribolus mauritiana*	○	○	○		○		
		ヤクジマダカラ	*Peribolus arabica*	○	○	○		○		
		ホシダカラ	*Cypraea tigris*					○		
		不明		○	○	○		○	○	○
	フジツガイ科	ホラガイ	*Charohia tritonis*	○	○	○	○	○		
		オオゾウガイ	*Ranularia pyrum*	○						
		ジュセイラ	*Septa hepatica*		○					
		ククリボラ	*Turrituriton kiiensis*							○
	オキニシ科	コガタオキニシ	*Bursa tuberosissima*	○	○	○	○	○	○	○

表3　出土貝類一覧表(2)

綱	科	種		各遺物包含層に於ける出土の有無						
				3	5	6	9	11	13	14
腹足綱	オキニシ科	イワカワウネボラ	*Colubrellina granularis*		○		○	○		
		オオナルトボラ	*Tutufa lissostoma*					○		○
	ヤツシロガイ科	ウズラガイ	*Tonna perdis*	○						
		ミフウズラ	*Tonna chinensis*		○					
	アッキガイ科	ホネガイ	*Murex triremis*	○	○			○		
		ツノレイシ	*Menathais tuberosa*					○		
		クリフレイシ	*Mancinella armigera*						○	○
		シロイガレイシ	*Drupa albolabris*	○						
		テツレイシ	*Parpura distinguenda*	○	○			○		○
		シラクモガイ	*Parpura armigera*	○	○	○		○	○	○
		テツボラ	*Parpura panama*	○	○	○		○	○	○
		ホソスジテツボラ	*Parpura persica*	○	○	○	○	○		○
	オリイレヨフバイ科	ミスジョウバイ	*Nassarius zonalis*						○	
	イトマキボラ科	ナガニシ	*Fusinus perplex*	○						
		コナガニシ	*Fusinus perplexus minor*						○	
		フトウネナガニシ	*Fusinus crassiplicatus*	○						
		ツノマタナガニシ	*Fusinus nigrirostratus*	○		○				
		ニシキニナ	*Latirulus craticulatus*							○
		イトマキボラ	*Pleuroploca trapezium*	○	○	○		○	○	
		ヒメイトマキボラ	*Pleuroploca trapezium audouimi*	○	○	○	○	○	○	○
	エゾバイ科	スジグロホラダマシ	*Pollia undosa*							○
	オニコブシ科	オニコブシ	*Vasum ceramicus*	○	○	○				
		コオニコブシ	*Vasum turbinellus*	○	○	○	○	○		○
	ショクコウラ科	ショクコウラ	*Harpa major*						○	
		ムラサキジュドウマイラ	*Oliva miniacea porpyritica*	○						
	フヂガイ科	ニシキノキバフデ	*Mitra stictica*		○					
	イモガイ科	ハルシヤガイ	*Lithoconus tesselatus*	○						
		マダライモ	*Virroconus ebraes*	○	○				○	○
		ハナワイモ	*Virroconus sponsalis*						○	
		サヤガタイモ	*Virroconus fulgetram*	○				○	○	
		ロウソクイモ	*Cleobula quercina*	○						
		ヤキイモ	*Pionoconus magas*	○						
		ヤナギシボリイモ	*Rhizoconus miles*	○				○		
		アンボンクロザメ	*Conus litteratus*	○	○	○				
		ニシキミナシ	*Dendroconus striatus*	○						
		ツヤイモ	*Chelyconus boeticus*	○					○	
		アカシマミナシ	*Leptoconus generalis*	○						
		タガヤサンミナシ	*Darioconus tesselatus*	○						

表3　出土貝類一覧表(3)

綱	科	種		各遺物包含層に於ける出土の有無						
				3	5	6	9	11	13	14
腹足綱	イモガイ科	ナツメイモ	*Textilia bullata*						○	
		ウスフイリイモ	*Rhizoconus troginus*						○	
		アンボイナ	*Gastridium geographus*		○	○				
		不明		○	○	○		○	○	○
	ナツメガイ科	ナツメガイ	*Bulla vernicosa*		○					
	オナジマイマイ科	オキナワヤマダニシ	*Cyclophorus turgidus*						○	
		不明		○	○	○			○	○
斧足綱	ウネガイ科	エガイ	*Barbatia decussata*	○	○	○		○		○
		ベニエガイ	*Barbatia bicolorata*	○	○	○		○		
		ヤグラビョウブガイ	*Trisidos semitorta*	○						
	イガイ科	リュウキュウヒバリガイ	*Modiolus agripeta*	○						
		ヒバリガイ	*Modiolus nipponicus*			○				
	イタヤガイ科	リュウキュウオウギ	*Comptopallim radula*							○
	ウミギク科	ウミギク	*Spondylus berbatus*	○	○	○		○	○	○
	イタボガキ科	マガキ	*Ostrea gigas*	○	○	○		○	○	○
		ケガキ	*Saxostrea echinata*			○				
	キクザル科	キクザル	*Chama reflexa*	○	○				○	
		シロザル	*Chama brrasica*			○		○		○
	ザルガイ科	アサザルガイ	*Vasticardium alternatum*	○	○					
	ツキガイ科	ツキガイ	*Codakia tigerina*	○			○			
	シャコガイ科	シラナミ	*Tridacna elongata*	○	○	○	○	○	○	○
		ヒメジャコ	*Tridacna crocea*	○	○	○	○	○	○	
		オオジャコ	*Tridacna gigas*	○	○	○		○		○
	マルスダレガイ科	アラヌノメ	*Periglypta reticulata*	○	○	○				
		ミスハマグリ	*Meretrix lyrata*	○	○	○	○		○	○
		リュウキュウアサリ	*Tapes litera*	○						
		ホソスジイナミガイ	*Gafrarium pectinatum*	○	○	○	○	○	○	○
		ヤエヤマスダレ	*Katelysia hiantina*						○	
		カガミガイ	*Dosinia japonica*		○			○		
		ビノスモドキ	*Venus foveolata*		○	○	○		○	○
		イオウハマグリ	*Pitar sulfureum*			○				
		カガミハマグリ	*Pitar indecoroides*		○	○		○	○	○
	イソシジミ科	マスオガイ	*Psammotaea elongata*		○			○		
		リュウキュウマスオ	*Asaphis dichotoma*	○	○	○	○	○	○	
	ニッコウガイ科	サメザラ	*Scutarcopagia scodinata*		○	○		○		
	アケビガイ科	アケビガイ	*Akediconcha kawamurai*				○			

表４　手広地区周辺における貝類の呼称・捕獲法・調理方法

科・種	手広地区における呼称	住用村における呼称	棲息地	捕獲方法	調理方法	採れる時期	その他
ミミガイ科 マアナゴウ *Ovinotis ovina*	ヌズリィンニャ	トコブシ	波の荒い海、珊瑚礁に棲む	満潮時に、リーフから出て来たところを捕獲	ゆでて食べる	夏場	上等な貝である
ニシキウズ科 ベニシリダカ *Tectus maximas*	タッチョンニャ ※「立ち貝」の意		リーフ内	素手	ゆでて食べる	夏場	
リュウテン科 チョウセンサザエ *Turbo argyrostomum*	カタンニャ	タマミナ	水深１ｍ前後のやや深い地点。珊瑚礁の終わる地点	干潮時に岩の間から素手で捕獲	つぼやき・刺身	一年中	リーフに多く棲息している
リュウテン科 ヤコウガイ *Lunatia marmorata*	ヤッコウケ		比軽的深い場所（水深２ｍ以上）	潜水して捕獲	身が多く、生で刺身にしたり、ゆでた後食べたりする	春～秋	殻を使用したい時は身に糸をつけて２～３日木の上につるしておく
タカラガイ科 ハチジョウダカラ ホシダカラなど *Perilolus mauritiana* *Cypraea tigris*	大型のもの┌ウミンニャ（白） └サデンニャ（色付） 小型のもの―ムックンニャ	ウシ	リーフ内	素手	ゆでた後、後背部を打ち欠いて身を出す。打ち欠く時は２個の貝を用いて背部を打撃する	一年中	錘として利用することもある
フジツガイ科 ホラガイ *Charonia tritonis*	ブラ（ブランニャ） ※ホラガイを吹く音に由来	ブラ	砂中	素手	ゆでて食べる。 身は少々にが味があり、あまり好まれない	一年中	殻を使用することが多い
ヤツシロガイ科 スクミウズラ *Tonna cepa*	アブランニャ		リーフ内	素手	ゆでて食べる	比較的少ない	
アッキガイ科 シラクモガイ *Parpura armigera*	カブンニャ ※トゲの多い貝（オニコブシ・ツノレイシ・テツレイシ等）の総称		リーフ内	素手又はドライバー状のもので掘りおこす	ゆでて食べる	一年中	
イトマキボラ科 リュウキュウツノマタ *Latirus polygonus*	スンニャ		リーフ内	素手	ゆでて食べる	夏に比較的多い	
イモガイ科 イモガイ科の貝	ブットウンニャ	ブットン	浅瀬	素手	塩でゆでる	春～秋	あまり好んでは食べられない
イタボガキ科 カキ類	ガキ	ガキ					あまり食べない
シャコガイ科 シラナミ *Tridacna elongata*	ギブンニャ ※シャコ貝類を総称していう場合もある	スワリ ※「ス」は瀬や珊瑚礁を示す語	岩の底に付着	アッサリグイと呼ばれる鉄棒を貝の外唇部にさしこみ、こじる	刺身（身が柔らかい） ゆでると固くなるので煮て食べられることはない	一年中	
イソシジミ科 ヤエヤマスダレ *Katelysia hiantina*		ムギ	内海の淡水と海水の混じる場所				
イソシジミ科 マスオガイ *Psammotaea elongata*		カキミナ	内海の砂中	干潮時にドライバー状のものを貝の棲む穴に入れ、貝がそれを食べる間に周りから穴を掘って捕る	ゆでて食べる	春	
イソシジミ科 リュキュウマスオ *Asaphis dichotoma*		クチボト			ゆでて食べる		
シジミガイ科 シレナシジミ *Geloina papua*			淡水と海水が混じる場所		ゆでて食べる		
ツタノハ科 オオベッコウガサ *Cellana testudinaria*	ナブンニャ ※「ナベ蓋貝」の意	コシナ ※「コ」はユル、即ち夜を示す	岩場	ドライバー状のものでとる	ゆでてたべる みそに入れて食べることもある	春～秋	
スイショウガイ科 マガキガイ *Conomurex luchuanus*	ドビンニャ		浅瀬の岩場	素手	ハリ状のもので身をとりだし、ゆでて食べる	春～夏	
スイショウガイ科 クモガイ *Lambis lambis* スイジガイ *Harpago chiragra* サソリガイ *Lambis crocata*	ウミンニャ 又はマヤンニャ ※「猫貝」の意 スイジガイのことをマヤンニャと呼ぶこともある				煮た後、殻をわって身をとりだす。生では食べない	冬	突起が７本のものは縁起がよいとして家屋の軒下に下げて魔除けにする風習がある
小型の２枚貝	マラツ	ウムギ			汁物のだし		
フジツボ	チヂフガ ※「チヂ」は頂上、「フガ」は穴を意味する	チヂブッカ	岩場	ドライバー状のもので捕る	汁物のだし		あまり好まれない

編者註

依頼者コードにある「手広第○層」は本論の層序と次のように対応する。

手広第１層－第３層　手広第５層－第11層
手広第２層－第５層　手広第６層－第13層
手広第３層－第６層　手広第７層－第14層
手広第４層－第９層

年測　第 KN-60014 号
昭和 60 年 10 月 25 日

社団法人 日本アイソトープ協会
東京都文京区本駒込二丁目28番45号
電　話　東京 03 (946) 7 1 1 1

測定結果報告書

昭和　59年 10月19 日に受取りましたC－14試料　9　個の測定結果がでましたのでご報告します。

当方のコード	依頼者のコード	C－14年代
N-4949	手広第1層	1590 ± 60yB.P.(1540 ± 60yB.P.)
N-4950	手広第2層	2860 ± 90yB.P.(2780 ± 85yB.P.)
N-4951	手広第3層	2770 ± 80yB.P.(2690 ± 80yB.P.)
N-4952	手広第4層	2680 ± 60yB.P.(2610 ± 60yB.P.)
N-4953	手広第5層	3280 ± 90yB.P.(3190 ± 90yB.P.)
N-4954	手広第6層	3550 ± 75yB.P.(3440 ± 70yB.P.)
N-4955	手広第7層	3990 ± 85yB.P.(3880 ± 85yB.P.)
N-4956	手広粘土層	3790 ±120yB.P.(3680 ±115yB.P.)
N-4957	サモト第2層	3160 ± 65yB.P.(3070 ± 65yB.P.)

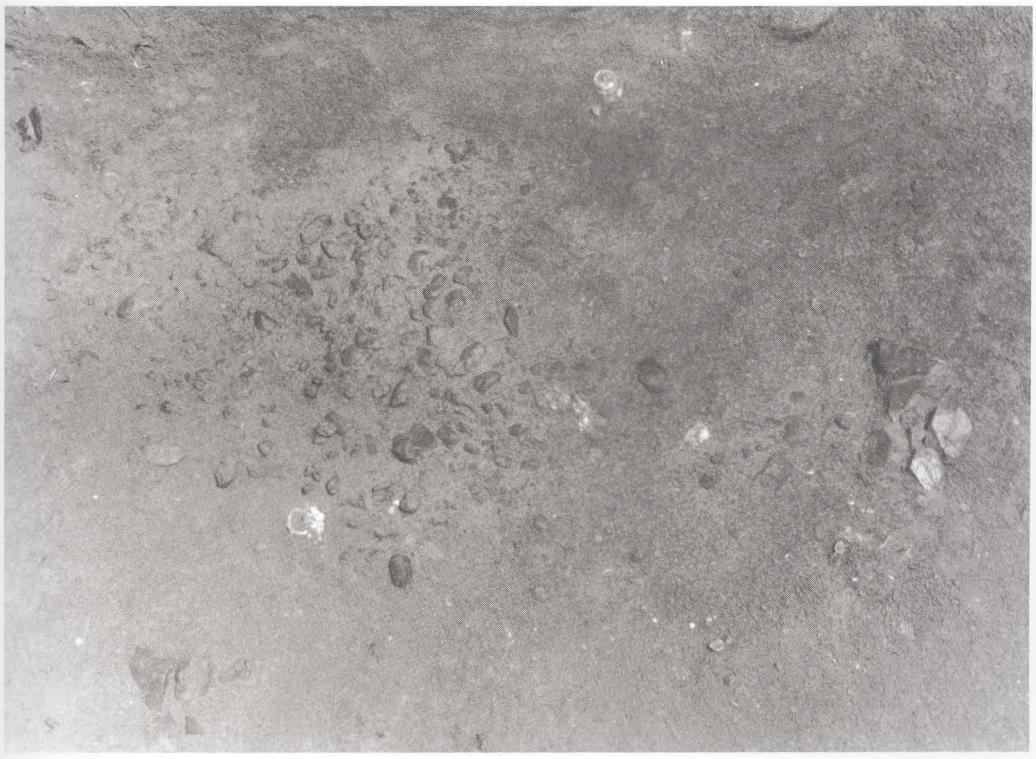
年代は ^{14}C の半減期 5730 年（カッコ内は Libby の値 5568 年）にもとづいて計算され、西暦 1950 年よりさかのぼる年数（ years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、^{14}C 年代がこの範囲に含まれる確率は約 70％です。この範囲を 2 倍に拡げますと確率は約 95％ となります。なお ^{14}C 年代は必らずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。（御希望の方にはこれに関する参考文献を差し上げます。）

この測定結果についてコメントがございましたならば、是非お聞かせ下さいますようお願い申し上げます。

	研修課	
	課長	担当者

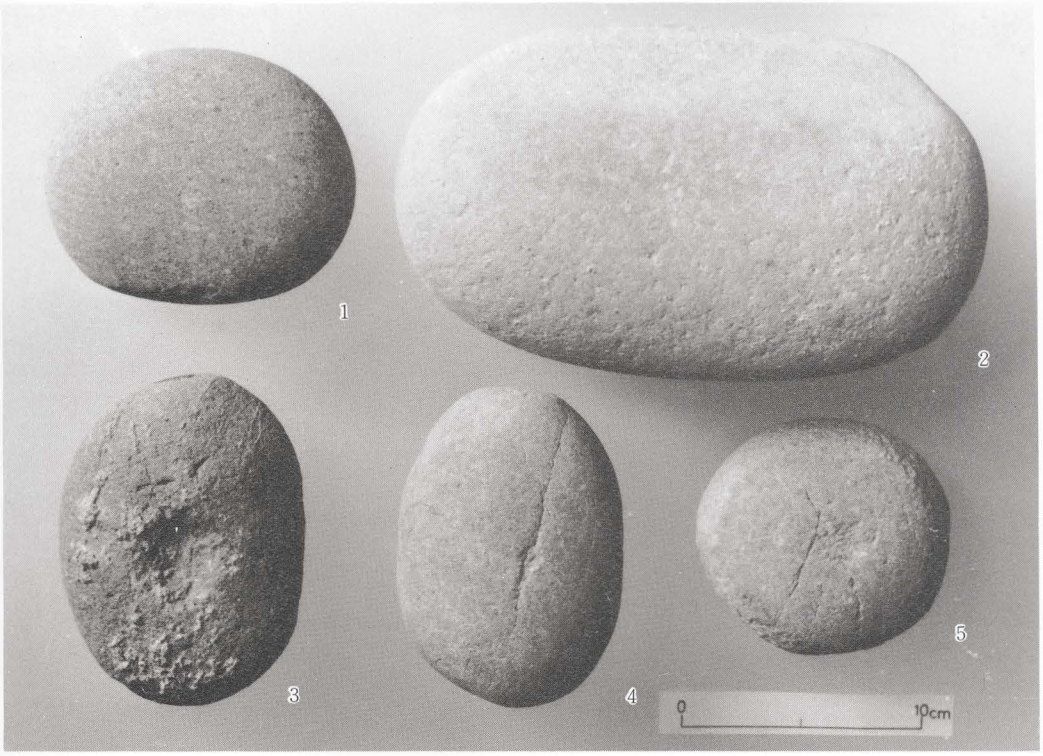
上：遺跡遠景（北より）　下：遺跡近景（南西より）

上：弧状配列ピット　下：1・2 号石組(手前)、3 号石組遺構

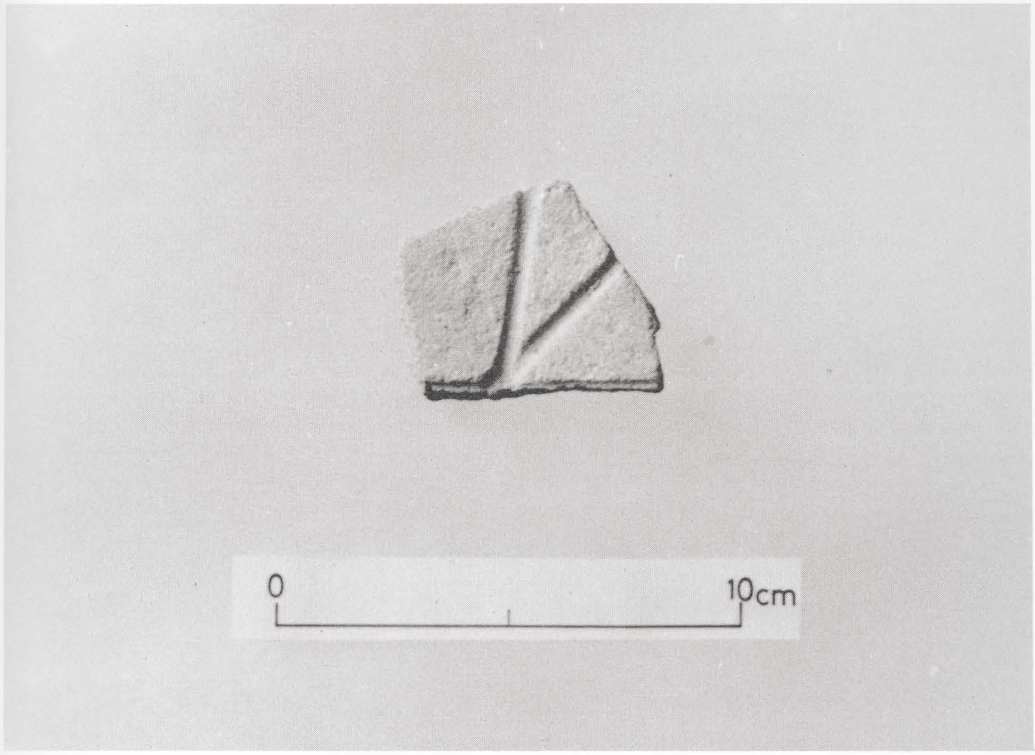


上： 4 号石組遺構　下：集石遺構(第 6 層)

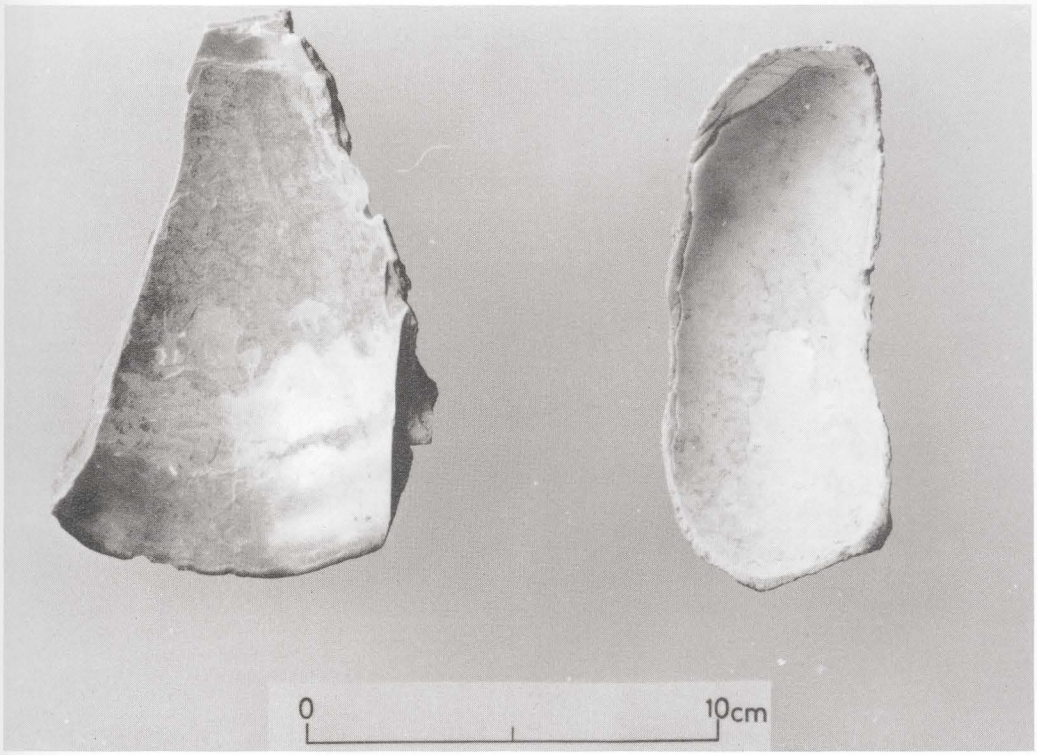
上：完掘後　下：土版

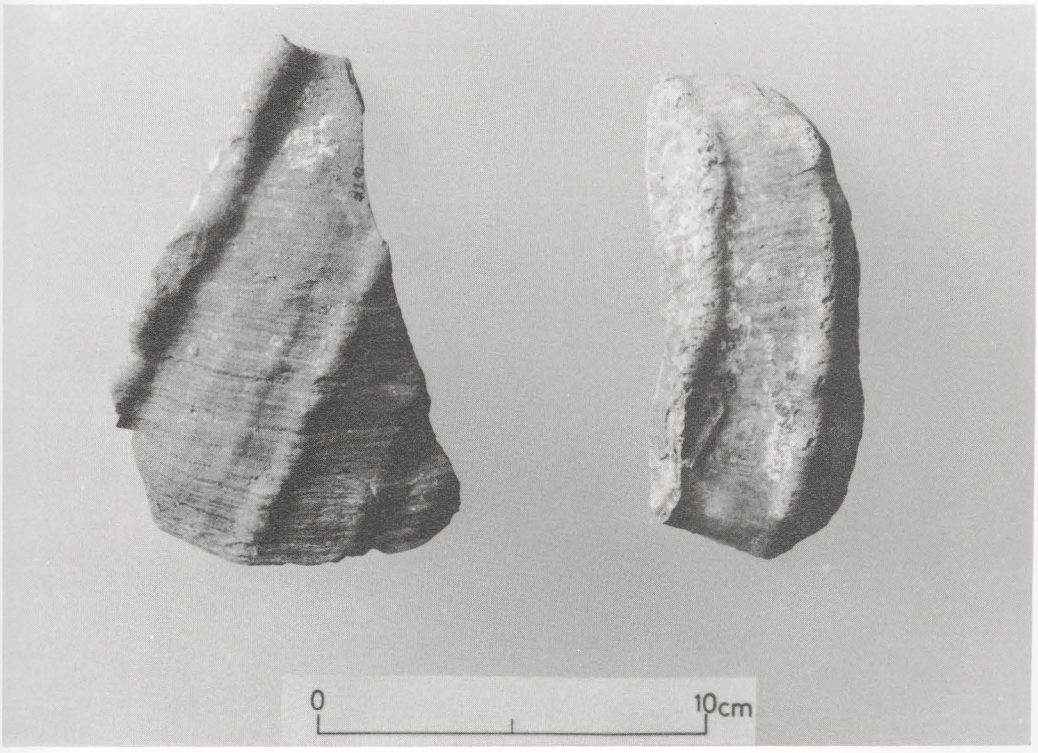


上：磨石・凹石・敲石（1・3～5）、クガニ石（2）　下：石皿（第6層）
（1：第6層、2・3：第13層、4：表採、5：第11層）



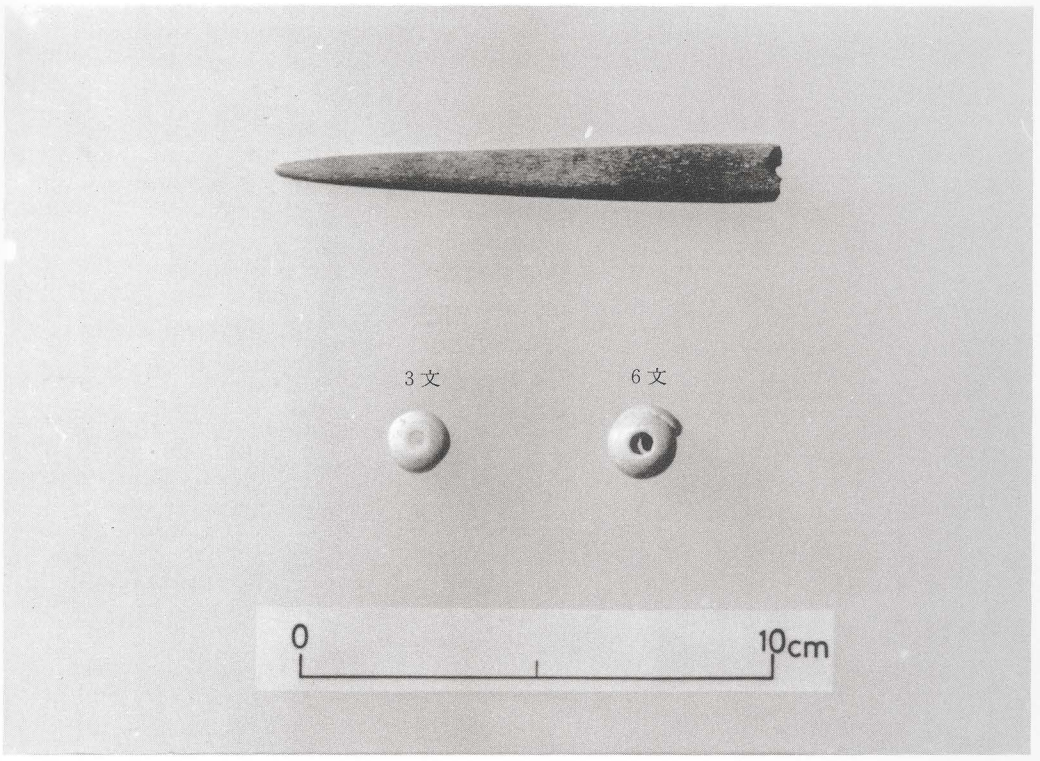
上：有溝石器　下：粘板岩剝片





上：貝匙(左:第３層、右:表採)　**下：同裏**

上：貝輪（左：第14層、中：第11層、右：第6層）　下：同裏



上：貝刃　下：骨製針、有孔貝製品(左:第6層、右:第13層)

手広遺跡

龍郷町文化財調査報告書

発行日　昭和61年３月25日

発行者　**龍郷町教育委員会**

鹿児島県大島郡龍郷町浦110
〒894-01ＴＥＬ 099762-5111

印刷所　コロニー印刷
熊本市二本木３丁目12－37
〒860ＴＥＬ（096)353－1291